

あんぢはいつくの人ぞ

答曰 和尙と回國

國に何事も侍らぬか

鳥はかうく雀とちうく

こゝはいつくどかするや

ひらささよ染たる野邊

いかんとしての染けるや

尾花朝かほ紅菊柴蘭

ちりての後といかん

宮城野がはら

原よ何事の侍る

水と流れて沈々風と吹て煙を

よら哉やこれくと請じ茶をまぬられよとて

あよそのあまぬらせたくとおもへども

達一宗よえ一物もなし

返歌

一物もまたをたまはるあゝろよそ

本來空の妙味なりけり

やされければ一休のたまひけると聞及びしつり蜷川をのにと道心者なりとて感せらるける
よて四方山のはまし過て親當すされけると少し承りたれ事あり邪正一如といふ心得を

るのよく侍るや一休開玉へとて邪正一如の心を

生れてと死ぬるなりけりれしなへて

しやうもだるすねこや朽子も

又問空即是色といかん答へて

しら露のおのがすがたを其まゝ

紅葉にわけをくれなるれ玉

又問色即是空の心と

花を見よ色香もともあちり果て

こゝろなくとも春と来よけり

又問世法

々の中ぞくよてはまして寐ておきて

みてそのもちとしぬるをのりよ

又問佛法とていふ成心得をよしとし侍らんや

佛法とてあへのさかやき石の髭

と一々問ふ言葉の下は歌々みてまたへられければ親當舌をふるえかして聞及しよりたけ活
 僧のなど頼をしく思ひけれをいよく道を示したまごきいつまで語るも濱の眞砂のかすく
 なれを先ほいとますすとしてしほり垣の邊まで歸りけるの手をえたとうち立歸りて一大事の安
 心わすれたり佛ふといかいして成けるぞとやけきを一休死やつとくせものかちと思しめしそ
 れといと易き事ごとてふんぞりかへり八目口をひろげてのくして佛よとあるよどのたまへを
 親當おどろき活大禪師のなど心空及第してこそかへりける

○一休和尚と奈良のたれ木といふ處に折々とおとします其邊の村々は近衛どの、は領地おて有
 けるが左近尉といふ家老百姓をひたそのせぶり取ける百姓ととこきをなげきていかいせん
 とひしめきあへり其内老人やけるはいかよ百姓おわたりきつしとても武家ととこるか違へし
 は公家は長袖赤きを訴へやて見んとて訴狀をたくみける所へ折ふし一休鉢をひらきお出給ふ
 百姓ども一休を請ふこの訴狀をば書下されよとたのみけれを安事なりいかなる事ぞやとのた
 まふよしかくの事の上しやけれを長々き狀までをかし是をもちては館へさ、げよとて
 よの中と月よむら雲となお風

近衛どのよと左近ありけり

とよとて是をさらくとした、めつかとされければ村々の百姓かゝる事おて免多くたまごる
 事思ひをぐらすとやけれを一休ひらさら此歌をのみさ、げと仰られて歸り玉へをせんた
 ちくこれをは館へさ、げ、れをこれ何その、よみけるぞと仰出されける百姓やけると薪木の
 一休の作にていとやせをその放者ならでとかゝる事いとん人今の世も覺ゆると興じ玉ひて多
 くの免を下されける

さておどけたるとなし赤れどもある座頭がよとで山椒よむせたるかおのしるさうとさした
 きをさかしき男居あせせたくしそのまねをきて見せませうとて手元にありしさんしやう
 を二三らう口へいれてひとつふたつしわふきして口をどがらし目を白く黒く赤して舌をす
 くるうちよ此男誠にむせて息を内へをりして水をくといふさへ息いでとまろりてそこ
 へたをれて目を見つめたるに一座おありしほどのその誠にむせたとと夢さらしらすさて
 もよくにたり眞お物のまねが上手きような男じやうつりますよいやくとほめて心にあま
 りながきまねじやとおもふうち炉の中へおけまろひたるにそまだわきよりとまねと思ひた
 るお炉よておびんをやきあまつさへじまんはほうひげけむりとあしたる跡を見て是とま

にひせたるやらんとおとりにみなくおどろきて水をけませ薬をもちひてよびつけしにやうくの事にて息出まづわたま灰だらけなるを打とらひなどおどろきやくるしかりつらんと笑止のれを彼男へらす口よ何とあまり真似がねんいりて真心のくるしまよ面目灰にまぶしやたと秀句にし大笑して座をたちました其頃は近邊此さたをかりをあして笑ひいどなり先此やうあまねことんといらぬその今とき若衆とどかくいらざる役者またこそのもらひの真似ををし給ふ同じ口てんがうあらたよみその切はしでそのあまで一日こゝで一日聞て庭訓往來山高きの故に貴方お向て武道勝利を得ざる事子程子のいとく孔子と大學のいふしへなんぞたとへ取集めわけもなふてめどもかやうの口てんがう聞安し扱とうたひでも爰一町て十番はどうとふくらぬでも余の口まねよりときよよしかりうめもよ真似をきされよと事かやうの事は子どものときから親たちの心得てやういひさかしやりませ先入主人とやて子どもれとさ覺たることしよりてもわすまざるものあり

○一休丹波路へおせむさ給ふある山里に二三日とうりう有けり在處のもけしやけるといふにたびの僧の郷境ふ二町ばかり南郷に天台の寺のひが此寺夜るよなればすさまじた家ありして色々しぎなる事どもあるより我すまんといふ坊主をし其子細と去々年たびの僧たのみお

たたるに去方より三年忌の卒都婆をたのまき此坊主の書たるの其より時あらず火焰をゆる其火の高き事一丈をのりあり郷内とすよ及むすりん郷二三里の外までを其かたれなしされを其坊主をさまぐく經多羅尼を修しとむらひしかどもしるしあけれをいつの頃の此事とつかしくや思ひけん夜ぬけして行方しれす故よまの里の女わらべくるにもあきを恐れて門せせへを出られす其のち或坊主を入置しお是も三日とよらへすして又出られ其けりわれ住せんといふひじりなければおのづからあき寺とありくちとてんあを惜うひへ是とゆかなる事あてやあらん一休聞給ひてさやうの事といかほどもあるとこそそれと別のとよてとあるまじ定て卒都婆の文字の書ちのへしもあるらんそれがし書なほし参らせなを別の義あるまぢさらん同道すさんとてくだんの寺に行見給へを法華經要品ありわんのとく文字一字ちがひありあらため書直し給ふ其文字おいとく十法佛土中唯一乘法無二亦無餘佛方便説とらよまれを立わられよかさねて子細とあるまじとて和尙とそれより西國方へまよろさし給ふ其後と此寺無事おなりよけりひとへお和尙を神佛の化現ありといとぬもりあかりけり

○又丹波のそのべより三四町南れ在所おかめといふ女わり母一人よぞ有けりその三四軒とありの喜八といへる者の方へ縁付のやくそくありしに或者いなる意趣やありけんさまぐいひ

さのして契約變がへさせて隣郷よりあるもの娘をくび入けり此女あれを無念よおもひて病
とあり終に死たりしが、の喜八あるものゝたへ亡靈よとあきたりて恨をのへ喜八の首をし
ひる事たびくおして其恐さのざりなしながらかのむのへし女をねそろしくて親里へにげ
歸れり喜八の親類此事をあげ死神子山ふしをたのみてさまぐ祈禱をなすといへどさらば
止ざりし折のら一休國部にまますよしをさして此よしをねがひしと和尙破地獄の誦をさ
てあれを喜八が首にかけぬるべしまた家のうちにこるべしとのたまふを敷のまふあしけれ
を其後ふたゝび亡靈死たらしりしとなり

○又廣瀨三木の郡より二里をかり奥の山里を修行し給ふは在所のめんくやけるを修行者あり
何國より來り給ふ人ぞ此邊之草ふの死山なれを元より佛をくやうする事なけれをまきては僧
あどふと一鉢の慈悲をはとますといふ事もかつていらす誠か今生の罪人といふと我々が事あ
らんぬこれ是非をしをらく逗留ましますせのし一偈一句の道理をさうけ給たり活佛にこそならず
ともせめて死佛ともならむをさといひて四五日もこよよといめ置けり一休やさると是より北に
あたと松林の見ぬいひの成どころあていやは在所のものまたへては尋なくとをヤ上たき事にて
いあの林むつきては物がたて有抑あの林れうちよ古寺ありしるにむかしより變化ありて其

形何ともしれぬもの三人出よさくおどりくるふいか成法師にても三日と住せずして立の
之此寺古來より由來ある寺にて本尊と一刀三禮春日の作とやらんや傳ぬい之尤什物をあまた
あるよしなれどかの變化にてたれの住せんといふをのさしは僧貫くましますをあこき變化を
もしりぞけ給ひて此寺に住したまといはれよときたるをろまびあしととしく語りけきを和
尙さく給ひそれこそ一だんの望みあり佛道修行もさやうの寺をとりたてよまそ本意とヤベけ
れいづれもたのみやととやく肝煎られ給はれどなたまへばいづれも大まをろこびてやがて
同道し彼寺にどをさひ和尙ひとりを残して皆々にげかへいしよかるよ其夜五更おもあれを聞
しふたがえず人音して三人の變化出たりおどろくるよ一番よ出しせけものがうたふをさけ
を

東野のをづといとしい事やいつをらくともおもひせいでせはねとそんじあし
うちをりて終にこのべのつちとさるく
又二番目の化をのうたに

西竹林はけい三どくとゆるかひもあれたわようまれ人のあさけを得かうむらで
竹のとやしにひとぬるく

又三番目の化生の歌に

南池に鯉魚をつめたい身やな水を家とぞまらどもとをいづもぬれくひやく

とく

どうたひよたそのおせりける一休一々合点したまひ何さまきやつらをしりぞけん事やすかる
べしと思ひてさて夜を明し所の人々をくびよせ變化のやうをのたり先一をんに東野のむづと
いひしと起より東の野原に馬のされかうべあるべし又二番と西のやぶのうちに三足のあはと
りわるべし三番とこれより南のかたに池ありて其うちに鯉すむべしよれを取集め給へとの給
ふほどに人々ふしぎよおもひそれぐさがい求むるに其ものまきくありしかを一休其品を
舞ひて誦經し玉ひしかを夫よいかつて怪しき事あく一休とあともまかるべき僧を住持せしめ
和尙とまはく興へと心ざし玉ふつて今よいたるまで一休を權者といとぬものぞき

さて今をんれ要義と妄語戒のあらまし講談いたしやさんさて妄語とてみだりにかたるとよ
みてうそつく事をいませしめたまふなり經よいえく妄語の罪衆生として地獄畜生がさに墮し
てくるくみをうくたましく人間に生るると二種の果報を得る一に多誹謗せらる二ツに
常々他人のためたふらかざるをあり此心とらとつきたるものは地獄におち又餓鬼道お

おち入てり畜生よりまる其わひた十年あらす三十年ならす百年二百年ならす何千何万年と
いふ限りおた間此三惡道をへめぐりそれよりやうく出てたましく此世よて念佛の聲經を
とむ事をちよつと耳ふられたる功德おつて人間道ふうまされさてうれしやと思へを今の二
種の因果と誹謗せらるといふて誹もそしるととみ謗ととしるといふ字にて人よひたその
そしらるゝむくひを得二ツに多く人のためたふらかざるゝは切てこの盗人めよ何のかの
とたまされかどわのされて手よ持たるとその人にとらる當分我が身のよ死事と思ひて談合
にのる程の事皆かたりにあふて損をする又しても身軀を持てこなひてとたはれ手に取事も
大とつになりつゝ身よくづして路頭にたすむ身とあるを多人のためたふらかざるゝ
とは説玉ふなり何れもこれを聞たまへうそを付て當分人をたふらすとはおもへともむくひ
が昔わのが身おむくふてあたまのわがるとのあいとみな大ききあうそをつく故お物と堪があ
かぬ事なりありそめにもいつとりをいとぬやうおし玉ふがたしなみ是よ付て商をおしやる
衆のふしんがぶさるうそをついて當分後生がわるのらふから私どもと得うかみますまひと
わるによりそれと又おせよとへをされを商ひをいたすからとたへ五十目いたす物も六
十目とて七十目ともすあたららしい田舎男があれを此男をぬかすくぬくものとおまひと思

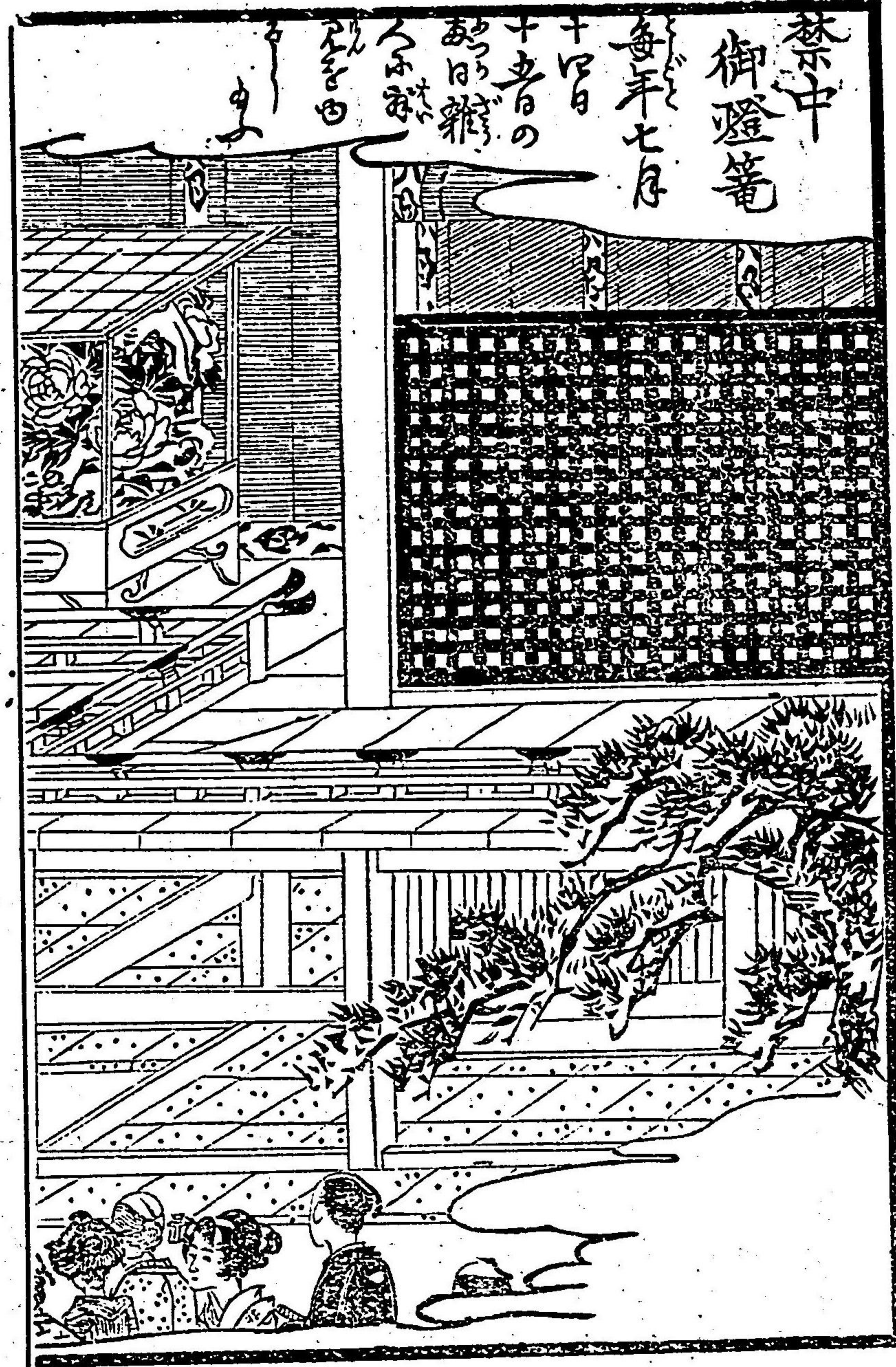
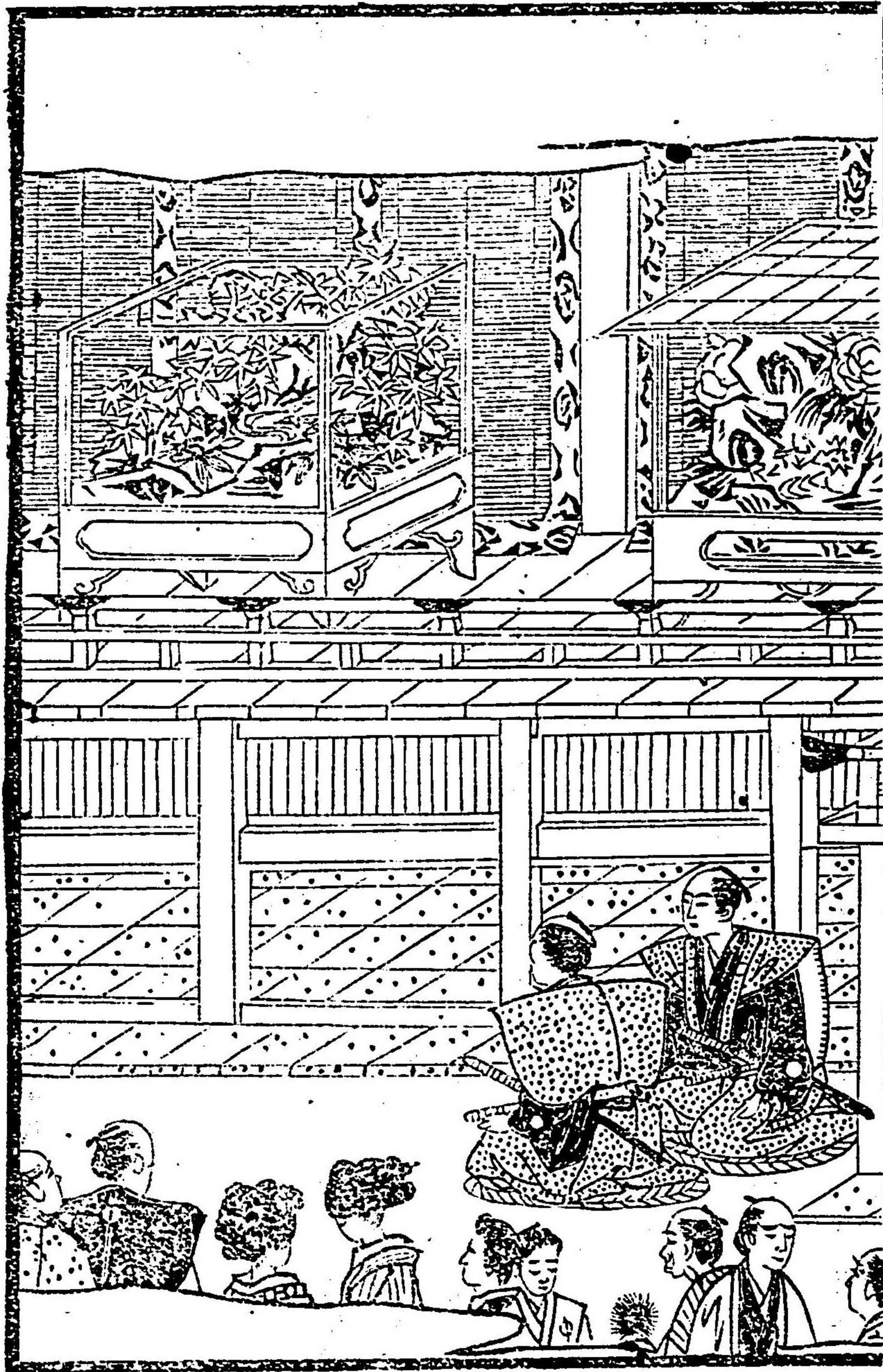
ふて十夜ものを一貫目といふのけて九百目はと直を付ても未ふそくらし死かはをわざとして恩よかけてまけるふりといいたし扱同支都同國同いなかの内にて之商の功者の行程此やうならそをやかけ又其外人のくらぬ内証算用あひの所でせわれながら是とかいて出るはとさうそトやがとぞんトながらすぎえひの事なれをやさねを掃あつたさて今晚のやうある妄語のいさしめをうけ玉これをおわいすさまトい罪を得まとなれをいれと何とぞ了簡あめ九ひませぬがとふぞこをば談合あさき下とさせなんだかといふ人のおさる此ふしんおもあふて叶はぬ律義さいひふんで侍る此うその罪もあるかならぬかのせんさくと明晩いたして聞せませう

○さて又讃州又備原兵内とや武士あり久々わづらふて醫術を尽すといへどもさらふ其しるしなし殊よ重病おれを最期近づきぬ折ふし一休禅内よましますとし其のえれなく内々殊勝なるは坊のよしき及ばれいそぎつかひを以て此度りんとうの一大事をめだらせ玉ひですぐある道へ引入たまこい有つたるべまどやつかとしける一休聞しめしこれこそ易き事なりとて其まゝつかひとつきて参らるゝ利尙とりつくらふ事もなくやぶれ衣ふやぶれ紙子け所々このりとなれさながらとびの身ふるひしたる風情もこまくりまだましならんといへる風体おて病人

此間近くより給ふ家内の人を日頃さゝおとびし僧おれば何さま成佛安心至極のむねを聞べたど我もくど次の問あつめかけかうべをかたふけ耳をとましてさく所よ一休なよとさく病人の耳あ口をわてゝ大音おて曰ふえ

汝すであ末期や我を行人もゆく只これ一生と如夢 如幻

とろくいひすてゝかへりたまふ何れも勝手おと一門家の子あつまり儲えくめづらしからぬ一休坊主のすゝめかな夫りん終をすゝむるといふ事と成佛かんじんをいむたかせて心安えおとらするをまそりん玄うの一大事をとゝむるといふものなるまかゝる語と坊主のいふ迄もなと皆がんせんよ人といふ事なまさて一狂の坊主かなと口々よやあへりかゝる處へある出家たたり此としとさといやゝとそまど何れをば不台点あり一休はせよそいへかやうの語まそいかよも殊勝おほぼへい惚じて禪宗悟道の坊主さどといふをばと余宗さどのやうよあるひと念佛題目をどなへ尊ひとあるへは参りやれありがたき事のおととるさどいふ事と禪宗なんとはやさぬといかおもく右のすゝめしゆしやうやとやけきをいづれもとせめてさよよそと得ととなし皆一同よのんトけるさては内お恩を深くかうむりたるもれどもはさいおの順死の面々たれくなるぞと其用意とりぐゝおひしめさけるを一休はのかあき玉ひて其夜門前よ



一首の狂歌をたてられける

世の中に生死の道もつれとなし

たいさびしくも獨死獨來

明れば内ものまれを見付てさつそく老士へもち出て何れをうちけりいかなるものも立つ
 らんどせんざしける折から又かの僧やさるゝとあり作者別人ならず一休禪師も必定せり實尤
 の狂歌かな此うたとみか人といどり來てひとり死する身なれをたとへ誰かれ冥途の供をすき
 をとて便おとあるべけんや五十人百人殉死すると自業自得過なきをめんくの罪障にけり
 百人が百所へわかき行て主人お付従ひ行そのにあらすされをあたらし若者どもを殉死させん
 を歎きて此歌を立られたるならん今殉死せん命をまつて世繼の君を守護せし玉とんこそは家
 長久ならんと理を尽してやされけれをみな此斷も同志つゝかさねて殉死のさたとありけり
 されを死するに定りたる面々一休を活佛と尊みしと斷りせめて道理あり

○愛よ一休津の國の山里を通り玉ふに二人の山かつ有一人は伏倒てあり今二人と畑をうつ父子
 ありよりて見玉ふおむすは毒蛇のためよさうれて俄も死たり父なげくけし死もなく一休にむ
 かつては房そのおとする道のはどりに小家有これ我等は内なりそれよりめしを持たたるべし

只今息子に俄に死したりさすきを一人の食をのりもちて來れとやてたべといふ一休ちかくよ
 り玉ひてそを父子の別とのあしかるべきのいかなれを汝とあげたの色あさぞといひ玉へを男
 こたへていと之親子鳥夜林明方々如飛去とこたふ此意と親子のちぎりと鳥のくるをやしよ
 り合て夜わけてと方々へとびさるがとくわづかのちぎりの間おれをなげく事おしといふ心こ
 一休それよりおしへの家に行くだんの通りを女房よづぶさにかたらるゝ扱ととて二人れまし
 らへ置し食物を一人分さしおれ只一人のをかり持て出る一休とい玉ふと其死たるをなんぢが
 爲よといのにとよとれければおらとかためにと夫ありとやて少もなげく氣色なし一休仰ける
 とこれ世の中も死るといへを他人の身としてさへおれをもよふそにまして夫おらばのなし
 かるべし殊に女性とかなだものおれをいらいあるべしといひたまへば女またへていとく夫
 婚契市人行合要事過方々如散とまたへて行過けりこの意と夫婦のちぎりと市井より合てよう
 をとよのへをさきをめんく方々へちるがとしなごらへそふべ死のおあらずといふ心なり
 一休もふしぎの思ひをさしてさてもかやうなる山家にかゝる生死無常のまどといをよくあさ
 らめたる男女をありけるを感じ玉ふ
 さて前夜おやくそくやた先うそといふふまふまぐどざる其品々からやそろへて一々道理を

をつて了簡いたすのへすく此所をささとはど万事を通ずるのんもんのところくせけれをも
 心をしづめてさし玉へのの徳に成て永々の苦をぬける善根耳のものをとつてうを
 んわれ先釋迦如來世お出玉ひて一切衆生お法をひて聞しめ玉ふ惣して説法の義式で先禪
 定に入て今は何をひて聞せたのであらふと分別なさるお如來の心おは手みじかお三
 界唯一心の道理をひて聞せんと思し召れてとぞめお花嚴經といふ頓大のおしぬをひて
 聲聞縁覺よ説きさしめたまひけれをしつん卒のとく一さい合点せずそこで佛のおもひ
 玉ふと眞實のひねをとひて聞しめてと結句衆生等が合点行すさらを氣お入やうお何ぞ方便
 をとひて佛のこころにと思しめさねども先當分の氣に合して何成とをつへくと口おまの
 せてとしぢかなる事を取付て無事を有と説わる事を無事と説て見たりまたあるでせなしあ
 いでをさしとささむかしの物がたり今のとさしのやうよ作りあして五十年の間はとさな
 れた今時れ人をさかしき評判にもいかお佛のほとさなされたとても是とわまりあうとをつ
 かせ玉ふといふ人もありうとささまへありといふがこゝぞや先佛れうととと今れやうお
 人機お合せてとよも角にも衆生の爲れ事よとかれかし佛おかれかしよき心のおこれかしと
 善根とよめの爲よほとさなされたうとといひあがら其うそのほかげによりて三界の火宅を

出るとしとさり生死のうみをこゆる舟とありてつゆ極樂や寂光土や實報土なといふけつ
 こうある世界へ生て苦をまぬがきて樂を得る爲のうとささむ先是えけつあうあうとでは侍
 らずや然よ世の中のうとといへん人をたふらかしてありともかたりてありともおのれの
 爲のとささむかり心おかけて先さまの身体がつふれうとささむびをさられうとをさかすとす他の
 害よなる事とのへり見ず其をばさのつかぬやうにうとをつきてたらすを世界れうととい
 ふそのなりうとといふ名も同事でいかふ心持のたがふ事と天地黑白のさうるが有よとを分
 別して見れを佛と人のとく異なるやううとを説おぬしの身よらへはらす又ばんふのうその
 己を立んとて人をたねとどのちがひの有と格別のせんさくさて商人のうとよと先のけ直の
 事たいま是と何を買者も見せにたちよるから覺悟して定て商人のとせかけ直をいふて有ふ
 はとよまちらからもよいかげんよ直ざるへしとたがひよ合点づくなれを先よも少し合点し
 ぬかる事てあま然と是とかけ直と知りながらの上なれを世中のうとよそのやうおだまえたふら
 かすところかふて有世のうとよと之をしらせぬやうつくありまたある所の見世おは合点づく
 の上なれをよそのけ直さしとら直なしと書付しておくところもあり其外とかけぬがあるよ
 極るうへは少まもうとといふ物でとさいはとよかまへてうとよとすどとを随分どのけね

いふて利をあるが、んやうありなんば正直に商して、利がなければ妻子をとおくむ事ならず或ひ之且那に損かけ拂ふべき所へもとらとすとあるが、それの結句大うそとなり大なる罪となりて人のうらみをうくる事もくせんこのくやてもみすく生馬の目をくぢるやうな事と余里なまをけ直といふほどとめんく商ひする人のまゝもちにほるべきこととよ出家沙門と高利をとと珠敷のみとてそのまゝかへりて其家滅す此のまゝくらたを思案して渡世のための事なきと未來の事とさづかひなし惣じていひおさらぬ事なり人の爲おなる事嬉しがる事おかしがる事面白き事心のやとらぐ事は少しも罪みにあらぬほどにどかく悪ひうそをつのせらるゝおどのいましめでおさるまた武士とよと謀計とよと事あり是と又別義でござるがこれと追ておとなしませう

○一休伊豆の國よてある山人猿を一定とらへ柱よしぱり付なさけなくさうちたゝととてお打殺さんとすべきとよろへ和尙行わとせふびんにおもひ乞取ととさしやりたまふ折から夏の頃あいのしが或夕ぐれおとだんは猿いちおといへるものをふ死は葉に包みもち来り一休へさし出しける一休かわゆく思しめし布袋に豆を入れてとらせらるれをとりて歸りかさねて又其袋は栗を入てきたりみぎれとく和尙よさし出してかへりけるとなり畜生といへども命を助けられし恩

のほどをよくしれり然る人間の身として是非のわかちを知らぬはさるおもおとれりとかん玄玉ひ此事を且那がたてかたいたまふすましといつはりのな死となりけり

○又其ころ猶右衛門といへる百姓あり常日百姓の業をなさず殺生をこれみ大酒博奕といふお及むす其外とるさ事のよりなく大いたづらあるもの有常々猿をかひ世ける然るに猶助といふ一子あり嫁をむかへしのうち懐妊よて七ヶ月といへる頃右飼おける猿何やらんすこしいたづら致しけるとて猶右衛門大いなり猿を柱よくり付七八日も食をあたへずせめければ終に飢死なしけりかくて此嫁十月に満て出産とる處の女子目つき面つき猿のとくおして全身しのも五六分ほど毛生てさながら猿のと死小兒ありこれ全く親の邪見孫にむくふ處にして和尙まのあたり見玉ひしその物のたりれざるべし

○一休初發心のとき越後路へ修行お下りたまふに信濃上野のさかひ近きとよろよ湯澤といへるとよろよてとや日の西山にかたひくゆる宿をこひ玉よ在所のものやうは房宿を求め玉よならむむのふに見ゆる山中お古き堂ありまれば行一夜を明く玉へさりながらかの堂にと天狗住よしいひて住持するそなく久し死空院なりその心して行玉へ和尙をれこそ望む處なりとてやがて行て見玉よ此邊とて山多くて陸奥の方へ麓ついきよて駒ヶ岳坂戸山清水白峯

松ヶ岳を登りていづれも高山ありて物すおき土地なり和尙かの堂へ行て佛だんの上よわがり
 隠形の印をむすび心をいづめておとけけるともろよ夜半のころうへの山より人ならを二三十
 人斗の音にてさゝめきわたり来る一休すとやと思ひ見給ふ所は堂のうちへひらがり入を見れ
 る色白き、にげなる法師を手おしおのきかせて小法師とら二三十人前後をのこみて来りし
 此法師小はふしをらを庭にをひ出してきんぢらとあれみて遊ひひへといふのこまつてをら
 くど外へ出て遊ぶとき此僧一休を見てそれおかくれ居ひふは房これへ出られいへといふ
 一休さて見付られたりと思ひて何の用よいやとすさる、いやは房の隠形の印のむすびやう
 のあーくゆる見へすあり是へおとませおへすさんさらと物見玉へ所詮なきやつをらに見
 せすさーとおひ出たり先印むすひて見たまへさらばとて一休むすびたまへとよーく只今
 と見へたまぬぞといふてそのうちと主従ともようちまじとりて舞踊そびあつたがたみ奥
 山へかへりたり

さて武士の謀計とやとうとあつたれども左よとわらざる道理をねとさーすふ侍とことさら
 うそをつくと盗人と同一卑氣あれども敵とつと謀計と智略とてゆるくとかいことかあ
 つて随分色を見とられすたをかつてうつ法あり討負せると其うともへは大国を納め名を上

手がらものどよむれて官録あすむと見事なものなまてうと商人のわけねをいひても内を
 まもり外よむかつて損をかけぬえ手がらと名付捨れたる家をもたて人をすくふとかへつて
 善根とあり商人あせ色いろありて己一人よくあらんと利徳を心にのけて人の損失をかま
 ず手前へどう込む分別をかりせるものと一旦の依怙ありといへども終に日月の正罰をの
 うひるものなりとの託宣をわすれずわれを仕合あ一人をもよくなー平等お世をわたるへ
 ど心がけたるがく一人に損のけて己が仕合をするといふ品こそかこれ二榘二秤をつらふも
 同一罪あれを商の内にをよれらの事えせぬ事あり是と人にいらせず目をくらますゆへ買
 のもいらすわけねと合点つくなれと人をいらてねさるるふくとを明すとわらひれて有どの
 ちがひにて罪あならぬといふ事明白なりさあはれではふーんがこれでおざらふ

○一休關東心外寺よりむらくふえせし此住持もそのかみ同學あれをむかひのよーみを思ひ種
 々馳走したまふあるとき一休とせんのおまわり客殿へ出て四方をさがめておとする折から地侍
 と覺しき人供人四五人つれ来りて一休にむかひいかに坊此寺の寺號山號はなよとすぞ一休
 またへて山號と別法山寺號と心外寺とす貴殿といふあるは方よてまーまをぞ某と矢奈木雪
 折とすて此邊近き在所の之此寺をのねく承りおよびまお參詣ありーのるにめづら

一死寺號山號なりそれ三界唯一心外無別法よて心の外に法をしいる成をの是別法心外寺
とたづぬるに一休とりわへず答へていとくそれ柳の枝を雪折な一い成か雪折とよたへ玉へ
を此侍大旦那かん亥さてもく答話か一は死坊主かな我等の内々たくみてさへさ一あれたれを失
念する事あり又とかつて出さる事多一とく時ふかやうれへんどうせられ一事あつこれの坊
かなどぞのんじける

○又は雲水のまろ駿州富士郡大石寺に知音の僧おとすとてたづね玉ふ互になつか一う思召一
をらく足を留め玉へとて少一の滞留あり一より近村の凡俗を集め寺僧の法談など一玉ふを助
講などあり一折から憐り村よ村山といふ入喜兵衛とて大百姓あり常お隣なる身おれを殺生の
み樂みとせしが庭先の柿木お鳩二羽來りとまう一を得たりと鉄炮とり出ーたちまち一羽をう
ちおと一けるに一羽れ鳩ねどろき飛去り一がまた元の枝へ死たるとまうしを父も玉をこめめ
へ同しく打落せしがふと一休和尚の法談を思ひいたして鳩に三枝の禮ありと聞しつまさしく
此鳩とつがひのことおして雌をささへうちしや雄を先へ取し事や残りし鳥の元枝へ來りし
は死を共おせんと我が玉ふを待し事うたがひなし扱々鳥だにも夫婦の約あるものをまきよ
人間どうまれながら殺生をまのみ是までおまたもの命をどるを樂しみと心得し業因のほど

こそおそろしやとたちまち發心して一休のまへと一り行若きよりの我があやまりとざんげ
してはかみそをさづけさせたまへとて其座よて剃髮染衣の身となり全證居士と法號をうけ
明くれ念佛三昧お入八十有餘は年齢をたもち子孫榮へけるとあり其とき法名を下さるゝとて

こゝろよりくひよかけたる傀儡師
鬼をたさふと佛出さふと

○さても因みよおかしやさふ鳩といふ鳥とくれおおよへを親子ひとつ木に宿をなし親鳥のと
まうたる枝か三枝下ある枝あらでと子鳥と宿らす又鳥に反哺の孝ありといふ事もありまこと
生てより百日が間は親鳥あやしなれ百日よみつれば親を同じ形となり巢をこなれ餌をひろ
ふあり其後百日が間親鳥へ餌をくめかへす鳥なりよつて昔より古人の文にそ出たるぞらし
鳥ふさへケ櫛の禮孝あり人間どうまれて忠孝のふたつは大切よつとむべきれ第一なりやも
すどば不孝不忠のも出來るを神も佛もかあしみ玉ふて鳥ふさへおとるぞと示し玉ふはどに
鳥ふをどり玉ふ形おそ人お似たりとも人といひがたき必ずわぞれ玉ふな古歌に

父母よつかふおふぎのかなめから

しだいにくにそあ廣ふなる

何事もれやの心よかのへさる

おれかうしんけんといふあり

○越前の府中お長野銀助とて馬上の名人ひと一休福井より上り此府中よ二三日とうろうして萬
をどり行ひ玉ふお彼助もひとびに齊を上やたしとて和尙をひかへは齊もどきて四方山の
ものがたりけあるる方よりとね馬を曳て死たりは六かしながら此馬を只今一馬場せめて玉
これとやにやと死事ありとてやがて馬引よせのられしは此銀助とやと元來せんきの病よて陰
囊大腫たりけるか鞍の前輪よつかへて事のはのりよくさやうすを一休見ておかしくおそ
ひ

とね馬のまへわまかゝる大ふぐり

さんくんだりんとおれをいふらん

とよませられけきを銀助大お興トけるどかり

○又下総國相馬郡を通り玉ふ頃和知川といへる水上に大ぬまあり此近村にあるもの、妻十二三
歳なるま、子むとめを右の大沼のはどりへつれ行て此沼のぬしおやけると此娘を其方へ参ら
せ置よし参らせんとたびくひひけりあると死又件の沼へつれ行かくのと死いひけるに俄に

空すましくなり雨風まさりよきて沼の水立すますと事さざりなくいとぎ家よつれ歸りし
に物のあとより追くるやうにおおけきをいへくおころしく思ひあり娘父お取つさ日頃我
等を沼へ母のつれ行いひし事どなたるよ其夜大死ある地來りてまびの上舌をうおのして此
ひすめを見てとしをらくわりてとせぬる事度々あり爺親此事なんざ思ひいかゝあらんと
おげさかおしむ其頃一休同國よまします事國中おかくれなけれを知識と聞たづね行因果の子
細を語りわかしまみだを流して頼けれを一休さてと不便の事やとて猶もくとしく尋玉ひさら
を我文を書て得させんかかねて地きたるどき此文をとなへ聞かせよ二度死たるまじとて其文
にいとく

此女我女也母繼母也無我免争可取

のくとなへさかそへし重て來るまじとかきてつかえさる、此文の心と此女めと我子なり母と
まゝとなり我のゆるしなくてといかてかどるべきといふ心なり男よろまびくだんの地の來
ると待ける所よ又れいの如すましくして來るされとよとおもひさづのりし文を一々どお
へ聞せしかたたちまちさへて失よけり音類といへども物の道理を能とさまへ二度來らずとす
傳へ侍る

前のつぎをすませうさて人間といへとおなしものとおせへて人間もさまじく品位もち
 がひ都上筋といへどこれらうつくしひかと思へて田舎よそおとるを有佛といへて一佛か
 ざらず十方の芥佛を五十二位のしや別のわかれ其外おも名と同じ事でもさまじくちがひ
 がある是を同名異跡の法門とすすまたすさむ五迷といふ佛の身より血を出すとて其内
 や釋迦は身より血を出したるものえ彼提婆といふ惡人大きなる石をなげて指より血を出し
 それゆる地おくへおちられたそれでわるいものと提婆といふなまじゆるお釋迦如來の
 入めつのとて者婆といふいしや何とて今一度蘇生玉ふべかかさまじく療治の余り針を
 おしにたて、血を出したさお提婆があくと同じやうお地獄おつべしと思ふ所に案お相違
 し結句血を出した功德よつて天上へ生れて勝妙のたのしさを得た愛をせつて合点したる
 がよい尤佛の身より血を出した事と同じ事なれども提婆と佛をそね見て血を出し者婆と
 いのちをうしみて血を出し取たり血をいだす事と同じ事で心が格別なふよつて地おくと天
 上とのちがひえ出来るまづそのとくうそをつくと同じ事てよい事のため人のため善根のた
 めあつくと同トうそでせういどといふとをしめさせられんがため提婆を地おくと落し
 ぎをて天上界に生じさしたるものじや是とまづ經の心志やうそのついてもつかいでもの事

このつかぬがよしすい分どりちぎよつとめたが當分いつとりかざりたるやうに見事おかけれ
 共神佛のほ心にかあふなりかなへて現世お福とくを得後生おおくらくへめでとふ往生
 し成佛をどげ常樂我淨の四とく波羅みつおのりのをまやはしやのわいの念慮もなし常住
 不退の微妙の説法ちやうもんじ、んぐますくともみ後おのづからまた衆生利益の心
 もおより玉ふべしわらうらやままの境界や南無のみだ佛くさて此度おれくの望おたり
 五戒講談をあらましのへままたどかく大悲經の中の種といふ種の字をわそれす惡いたねを
 まかぬやうおよきたねをまかせられよらし今一冊の愚僧のあゝろみの法語なり皆人この文
 をとて邪見外道の思ひをちして直に活佛とあり給ふおしぬを書のおしませう
 ○こゝに常勅徳念寺と淨土寺あり住持の長老の旦那にて有けるおいかいおもひけん先祖より
 代々淨土おていおが不計禪寺へ参り久しくじづらひて程なく死けり其子すあち禪寺の住持お
 めんどうを頼むよしをか徳念寺はのかあさうて中を先祖とわが旦那よまされなししゆる
 をおんどや禪家へわたしてめんどうさせん事前代未聞の恥辱あるべしたとひ此事よ於てとす
 くびおほふともわの引導せんものぞと思ひ定て在所のもの其外あふれものを二三十人斗り
 かたらひみぢんになさんとひしめくを此よし禪寺に聞かしかをいやくさやうな六かしき死

人を取るかざるども何のいくるまのるべし入らざる事ありとて打すてぬ三十五日のどふら
ひすぎで此徳念寺俄に狂亂して狂ひ出て色々の事を口をしうけるを何れも且那衆めいとくし
て座敷牢を作りおし入かけを牢をやぶつて出尿をたれてと手よりぎりあるひと貞よぬを又と
己が食する飯器よ入て在所中ををて歩行丸裸となり着ものすんぐみさ死家々へとび入
人の妻子をかし付ぢち倒しなをしてさまぐ悪わるくひけるほど終おくるひ死あし、
けるがやがて火葬あしけるよ石などを打くへたるやうに黒くとなりけれども灰あもあらずふ
しぎよあもひ炭木を山のとくにつみて焼も少しも焼ず弟子もあれをみて大にひどり死これ
只事にあらずいひとせん評議す折から一休和尚其まろ常州ままし／＼けるが或人のサ
やう上方より一休和尚といふ知徳の僧下りぬたまふ此和尚あ子細を尋ね見たまへらしとやけ
る弟子坊主幸ひの事かあさらむとて弟子一休へ参りしか／＼とやける一休さ／＼給ひてとて不
便のよとのまそれ佛法とや人我れ相をといめて心を納るをもつてせんとすまして僧法師と
大じひ心をもつて専らとして人をあしゆるものなるに愚痴放逸あしてのをねをわらそう事生
ながら犬に似たりあさましき次第なりそれかしたちまち灰にして参らせんとて諸行無常の四
句の文を書たまひて是を死人のうへにあげのけ玉とい即時に灰となるべし早とく／＼とわれ

と添きしとてとりて歸り被ふすはりたる死人の上へあげのければあぶらをかけてやくが如
くべら／＼と焼て忽ち灰とぞありあけるふしぎなりし事どもありさるよよつて和尚を佛の再
來といとぬ人あそなかりける

○一休北國より京都への布り玉ふとき越前敦賀の宿をうち過かいつの山中あ一宿忘玉ふが何を
のかいひけん今とひ此宿にとまりしと都に名高き舞まひの大かしらあていまは入道して世間
をすて諸國を修行し玉ふと承るいさ／＼方々みな参りて一ふし所望せんといか、皆々是と一
だんの事かあとて大勢旅宿へ詰のけて一休に對面し坊とうけたまといひへハ都のたまたて舞
の大かしらどの／＼と遠國遠里までも其沙汰くれなし幸これに一宿し玉ふこそ後れたり
句あかしさん一ふし舞てさのせ玉ひへとせめかけてやげれを一休と大に迷惑しまれとお
もひもよらぬ仰るな見玉ふとき坊主おれを經陀羅尼なと少しぞんぢたるが其舞といふもの
とさらよしらすと斷れければ在所のものぞいやく／＼かにどのたまふともた一ふしの所
望いせひぐ／＼舞なきならむ今宵のほやどとかあふまといの／＼とせめかけて所望す一休
さて／＼と迷惑千萬さだめて人ちがひなるべしとさまぐ／＼わび玉へとも皆をんとうなる
里人おれば更に合点せず是非とも／＼と所望すれをしは去業去て愚僧けつして其舞まひにて

となくいへども一ふし舞されをほりへりあくをせんかたなし愚僧若きときよ高館といふ舞を
 少き見惚たるがほはつかなくいへども一ふし舞て見やさん先鈴木の三郎が紀州藤白より奥州
 衣川まで付去所を少しまひやへしといふよ在所のたかだちが何やらんしらせれども早く
 くといひけるに一休座をあらため扇をてうとうちてさる程ふすいきの三郎が家と旅にし
 やうぞくめさきつゝ藤白を立出て奥州さして下られけるはさふくたられけるほどくくとい
 凡二三十へんもくだらまけるほどはかりくりかへしくやされければ里人等はふしぎし
 ていかに坊さきはせより同じ事をくりかへしくのたまふといのい的事おや早く舞をまふ
 て見せられいへ一休さあらぬ貞よて三郎が紀州より奥州まで七十五日の日数をのりて衣川
 へつゝのきたる事おきを先くだらまけるほどにを三十日も五十日をすつゝけあしてそきから衣
 川お着しての舞をまむて見せすべしかのくくを此家に八九十日逗留して衣川の處を見たま
 ふべしと宣ひけきをいづれも顔を見合大よあされしをらくの間さへくだられけるほどにひて
 たいくつし侍るにいのでか七十五日が間さく事となるまゝとて皆々家にぞかへりたるとあり
 是も一時の才智なりと人やはへり

○今出川通によしや如齋といふものあり兼て和尙とまじとり厚のりしがうちつゝ用事しげく

久しと和尙のもとを尋さりしのを心おやかよりけん文をしたためて此頃と用事つどひいゆに
 は見舞もや上すはぶさたやいづれ近々見舞や上るなどこのの文をつゝとしける其返事
 よ

見舞とて見まふてくきぞ見まことすと

よしやトよさいと思ふ身ならば

とよみてつかとされける如齋これを見て坊の今おとぞめぬるさは事かおとかんじけるど
 ぞ

○一休和尙高野山お登り玉ひ四方の山々をさがめてさても聞しより尋さけしきのなごなごめお
 としけるお高野ひじりぞを立いできて一休を見ていなる人ぞと尋ねければ愚僧と名もなき
 道心者にて侍るが此山とどめて一見仕ひねば余り風景がおもしろく侍れをこし折の詩か歌か
 一首つかまつらんとぞんぞつくぐとして侍るとの玉へをひまごも一休と中々おもひもが
 けねをしはらしき事をいふは房のちとわざにいぬるめくらの垣のぞきすぐらの端て心なくさ
 ひとやその身のうみみてこそとてうとさむひげある形ふりみて袷は此山の名産高野のみそりの
 刃よりもうすきあり付めて細首のいとむななき体めて詩歌を案づるととできたりと口々にい

やしめ笑むけるよ一休耳ふもかけず空うとふさてれとしけるのやうく一首仕りたり硯紙た
まこれとやされければ何一首出来たるどやさらんを拜吟仕るべしとうち笑ひ硯紙を出しければ
一休筆をとり彼東坡居士が經山寺の詩を山がたや作りしを例とえて

此山形の詩のよみやうえ

- | | |
|------------|---------|
| 山秋落葉 | 山高近都卒内院 |
| 山春開花發空 | 山閑表華藏世界 |
| 山迎連峰報佛心亦 | 山迎連峰報佛土 |
| 山高近都卒内院土進空 | 山平幽臨化佛地 |
| 山閑表華藏世界地醒寂 | 山夏涼風煩寂 |
| 山平幽臨化佛惱亦 | 山夏涼風煩寂 |
| 山夏涼風煩寂 | 山秋落葉空亦空 |
| 山冬素雪 | 山冬素雪寂亦寂 |

かくのどく即時又筆をとりつらくと認玉へを山ひざり大おおるささても形容お似
合ざる見事なる筆跡といひ又目されぬ詩の体のさと明たる口をふとささのねさてく先刻と皆

々よまな事ともをいひては僧をとづかしめし事かへすぐめとづかしうこらいのある人ぞ
は名をきのり玉へと口々あやけを其詩の下よいどのたまへをまよとに小文字いかに一と
中どとたづねける其中一人のむじり眉をしむ此詩の筆跡をくく見るに京紫野なる
一休和尚の書ありさるから一としるされたいとよ曲者なりとふり歸り見るお和尚と彼
方へ下向し玉ふひじりたちそれといめまらせて過言をわやまれとてはしり付て引といめ一
休和尚とも存せずして段々無禮をやりたりは免わりて先々坊中へ入らせ玉へとるんぎんにのふ
るに一休いやく何を斷とり玉ふへき事おとらくあしとてさげんよく坊へ歸り玉へをひ
まどたちさまぐ馳走をまぬらせけるさて厚く禮をのべ下向し玉ひける跡にて一人のひじり
ややうかゝる名僧また登山玄玉ふ事まれあり願くと大師のは影又贊をたのみやたらをいかよ
といふあいつれも尤と伺しさらんを今一たびよびかへまらせんと又追かけ奉るお一休と
何事おやと仰らるれをしかくのくしやあ一休わらひ玉むてそれはどの事また立歸らずとを
なることば影を急持きたられとて道ある茶屋お休ておとしける人々おせろき大師の贊を請
ふよ立ながら思索もなくささる事聞より大博學の祖師のさと舌の根をふるひけり扱大師の
は影を持来りければ

弘法大師活佛死ねを野とらの土とある

と一筆よさらくときた、め玉ひて下向し玉ふ人々ふの事ありといふとき登山して學匠か
見せけれを格別のおどけ事なりしのをまたひじりとも口を得ふとのぞりけるをさう

一休諸國物語圖繪卷之四畢

一休諸國物語圖繪卷之五

○さて一休和尚能州蜷川村の草庵おましませし頃泉水のさきに水の上へれとんで横をひにね
ゆる松のありける弟子衆をわづめて此松を真直に見るものやあるとたづね玉ふ皆々立かとり
入かとり見られけれども横といの松あり其とき蜷川新右衛門参り合せてとれらいつあも真直
に見ていとやさされけれをさて如何ふと仰あれをまよとみいかみてこそいへとやさされけれを
和尚手をうつてよく見られたりとて五十則をゆるすと仰られける

○和尚熊野山へ参詣まゝくして本宮へあがりたまふころしを春の半なを山々谷々の櫻都三
月の頃よりいと目出たのりけれを拜殿よりうらの不の四方の風色をながめましましける處へ
社僧の人まのり出て客僧とたい人と見参らさすとやさけを中々わきらこたい人よてこいと
すはらんいへ出家よていとやさされけを彼僧ときをもつふと興あるは僧かあとひとつふ
たつと物がたりし玉ひて和尚の僧と少しとさせる者とおしめし高野山の詩の事とおほし
出させ此山よても一首を作りてあぐさまんと矢たてをとり出しさらくと書て彼僧に見せ玉
へ心其まゝ神前へそなへてさてくは筆跡見事おは都人と見やとひがめかどやさけは和尚答

へてよく社察（社察）しられたりわれは都紫野（都紫野）の一休といふものなりと仰られければさてはかねてきつたへし和尙みてましますのどてかの神前にさしげおきしをとり死たりとてもの事おは名を書付玉へどねがふにさらむ後の代かたり卿（卿）ともないなんと一休老人偶題（一休老人偶題）とを記し玉ふ其詩

七山里放光

五山瀧吟落碧三

三山海浪高船片雲社

一山廟等一扶桑神片漲景

二山客成群數万人輪塵春

四山樓鐘動月輪惱宮

六山谷洗流煩本

八山花猶瘦

一休老人偶題

さて彼僧（彼僧）と一休和尙なりとて自宅へ招し横礎（横礎）て庭をば杓子（杓子）で芋をとりは馳走（馳走）事おろかき

らす折（折）ふし花のさかりなれば庭前（庭前）のとあをそ見たまへとて酒肴（酒肴）をいだしてさぐさめやさての僧やけると此山へまたは越（越）あさるゝ事もとかりおたし末代（末代）の寶（寶）どもなきけきを何（何）よても一筆遊（一筆遊）し玉きとやけれを安事（安事）なりは望みあれどのたまへをさても拜殿（拜殿）おてのは作（作）れ詩体（詩体）といにしへよりそのゝる体の侍（侍）りけるうとふあいかにも古へよりありし事なり唐土（唐土）の東坡居士（東坡居士）が經山寺（經山寺）にて作りし詩体なりとかたり玉へをさてくめづらしき詩やされおゝる山奥（山奥）に住（住）てとに學文（學文）をなき文盲（文盲）の我々が目なれ耳なれすし相成べくと愚（愚）なる我々が耳をき目なれたる事をねがふないとや上げきを和尙うちうなづた玉ふ折から春風（春風）ふきて櫻（櫻）のむらくとちりけれを貫（貫）之（之）のうたを思ひ出されて

櫻（櫻）らる木のまた風とさむからで

空よしられぬ雪（雪）ぞふりける

れといかにどのたまへば彼僧（彼僧）のや是（是）をいまだ耳（耳）きれやさるる處ありといふ又さくらの花の風ふちらされさつくと見だれけきを其ま

雪（雪）やこんあわれやこんては寺（寺）の

かきの木よ一といふりつもれせん

南山村の南にありて
 一休の住居なりと云ふ
 一川として流るる
 寺の守護の川と云ふ
 佛の今ある所なり
 昔の寺の跡なり
 又此の寺の跡なり
 つゆありて一休の
 再興の跡なり
 境ありて寺の跡
 どの跡なり
 林ありて川田あり
 寺の跡なり
 寺あり



南山村の南にありて
 一休の住居なりと云ふ
 一川として流るる
 寺の守護の川と云ふ
 佛の今ある所なり
 昔の寺の跡なり
 又此の寺の跡なり
 つゆありて一休の
 再興の跡なり
 境ありて寺の跡
 どの跡なり
 林ありて川田あり
 寺の跡なり
 寺あり

く成よける妻子眷属なげきかなしみ遺言の通りつぶさみ一休和尚へ申上ければいとやすき事
なり扱々ふびんの仕合と仰られけるしかる所へとや時分をくは間和尚様は出をあふぎたて
まつると再三人をあとしけき一休仰れけるといや〜われら罷出るよふよをす引導のふさ
に奮てつかとすべし誰よてもとみわけさせてはふむられよと仰られければ妻子なげきて遺言
よては間ひらみ出下されは慈悲なりとさま〜ねのひけれを一休のたまひけるい
〜我等が出ればかへつてかれがまよひとあるを則書てつらひすべしとて

海中有毒魚一名云河豚魚

面腹白脊班人不食此魚

嗚呼痛哉又次郎食之忽死來

彼歳五十四 彼歳五十四

合て珠數一連百八煩腦の死つをふつと死つて行たい方へつとゆけ
木曾十七寅の年角のなふこそ添々けれ

とあそばしてつらひされけるとかやしければおの〜肝をけしけれども仰されを其ぶとくに
れよあむけるが其引導の書あるを其子供秘藏して今に傳て其家れたからとしかへもあふ墨跡

あて代々所持仕りて有けるとあり

扱前冊には約束やたる法語を書て参らす

○君がちとせをへんことをあまつおどりの羽衣よのふ

註君と諸人ありのふふ〜と唐の玄宗皇帝の代にこうふんといふ人じゆつをきして目
の前に宮殿ろうかくをさし乙女をくだして羽衣の曲をなさしひ玄宗皇帝興し見たまふに
しをしもな之死へうせぬとふるさ赤に見へたりしかればちとせをふるとを夢のとくにさ
ふんどの事か又四十里四方の石を羽衣にてあでつくすといふ効石のたどへわれバ久しき
事か見る人れふ〜るにまかすべし

○をんせいませいませいのふがうへ

此文をよく見てあかく生死をいあきて不老不死の身となれりと

○我見ても久しくありぬ住吉の

さしのひめまついくよへぬらん

わきどの大明神なりとみよしれさしどの苦をこあれたる彼岸をいふあり姫松といみやひ
やかにしていつものらぬ常磐木の見どりの松ありいふ心の天地のいまだとまさらぬ

きの神代のとき彼岸の姫松を見てかくよめり此神代のときといふに常にわたくしな死心
胸あり姫松といふも人々々々そこの本智あり松のみさはよて四時しほまぬ物ゆゑにたどへ
てかくいふあり今を身を姫松に得れを不生不滅小して變する色なくもるしみたへいなれ
て彼岸よいたりて安樂なるべし諸人此斷をしひてひめ松にかれどの事なり大明神とい文
字にねふきにあきらかあるかみどのく神といこころなるくらさまよひの人をあきらかよ
する神之また一説に姫松が變化して大明神となりてこの歌を詠せしともあう是をしらせ
んため此古歌を引玉ふあり

○目なきとらへ

目なしとい人々具足の自性なり自性本萬の見をばあるがゆへふかく名付たりをし佛を
見法を見心を見有を見無を見本末を見とべて何にてを一寸と見ても見る事あらば目あり
よして目なしおてこなし本より名もなく方角所もあ之然も天地に先だち万物よおくれ
古來無滅あく色形なふして千の色万のかたちよあらくる是世界國土のありとあらゆるを
のノ本源なり佛とを真如とも阿彌陀とも觀音とを本智とも自性ともいふこれをしるを佛
になる人とい悟りの人ともいふあり釋迦一代の經文も皆此目なしとの事を人にしらせん

がためなり

楞嚴經よ阿那律陀無目不見と説玉ひ

又同經よ曰阿那律陀白佛言我不知眼觀見十方一精真洞然如觀掌果

如來一印我成二宣阿羅漢

云々佛六圓通説たまふこれそのひとつあり是よよつて此註を目なしとい名付たりとら
へといたづねることとなり

○こゑにつめてまします

よろづの音聲をさくもの何者ぞと明くれとておかすたづねる心つゝおと目なしにたづ
ねいふべしかくのどくして尋終むひたる人をとわんおんととてむ觀音圓通の門とて二十
五のすさつの中よ第一の菩薩ととするあり

○扱一休和尚のは袋と淨土宗おて有しとかや一休常おのな法語をかきてつかはし又の水か

といふ雙紙を送りて道をねし玉へどもしかくはさとりをあく明暮たい念佛のよにて過し
玉ふ一休聞しめし一段のは念入なり念佛よて佛にあらせ玉とん事とすたごひあければ此所
より愚僧の庵へは出わらむに何のうたごひあくは出あるべし是よく常み道しり玉ふゆゆよ苦

もあぐさかくとあるま玉ひてを庵へとは出有なり又かた田舎人がわが庵をたづね來らんにか程道にまぐひても我等が庵ある上は何れたづねあふなりそのたづねるまでの心苦し死あいたがまよひなりと仰られけををしからを何よても示し玉へと仰られける一休さあちを一句中て見まわらせんとて

目なしとちく聲につらてましませ

昔人のさとりとやらんいふまを悟る其ならひとじめに父母もあくとつと已前の我身は何あるぞとらへあぞとらふものを知らずとよがむるものもしらす然と釋迦彌陀とよし日のとすがたりやとらふそのととすたりやいひけをを一駢してありける此心を見玉へと仰らきけきをば袋のぬくとく

らんとすとすらとねとむねあさたがられて

れとぬとさや佛あるらむ

と何とをしければ一休よろこびたまひてとりあへず一首をよみたまひける

しまと、やこころにかりる雲もあし

月のいるべき山しなけれを

とよみ玉ひては工夫尤くとてとろあびてのへり玉ひける

○そもくみち人たちの悟りとやらんいふ事をとるあらむとじめに父母とあさとつとせんのわが身と何ものぞいへさかんといふ

父母とと天地のまをいふとつといせんととどが心けあるととあさとと天とも地とを我とも人とも何ともすあしむとからぬまをいふとこうまれぬまをたをかりあふふべからすもし生ぬまをたをいふと千歳あまよふともしるべうらす我今までなき心のあにぞあはるありあこらぬまをにと其おありたる心といのやうにあつていたぞとかくのとくまゝをまつてしらを生ぬまをたをいへる

○あまとしてしらぬ事がすあるべくひやたいへんてつなき物ありと思ふべし

知らぬ事とすなとち目なしのことなり目なしと萬物もとあれたれをへんてつもなきとあり是めあしをいひあちとさんがためありしれをひとへに又しちすしてなきとらふよとめらすたいありともなしともあへばとやへんてつが有ぞ

○たどへたてしのとつ彌のはなもみち色々よとちりてもまたもとの根にかへるがおとしとが心のいろくにあこり又あくなるとぞたとつたり其心のおあり又さるとまろをとく

しるべし色々の心がぬこらざるは何者のぞるぞ急々お眼をつけて見るべしされこそ則
 目あしよ花もそのとくさきてちりてなくなるなり花のさくときよれ何の子細ぞちると死
 まれ何のしさいをなくなるんこれ何のしさいをぞいらせんがため之花を見てとちの心を
 しらひとせむふきて棒をわけて月をうたんとするがと死よりそつかぬ事ありわが心の
 うちで花の心をも天地の心をもあきらかおしるあり其證據おとよよみよ四時のうつり月
 日のごとび月しよくまで分厘もたがとざるありいにしへの聖人なれいどて天の外地の外
 まだめぐりあるさ見るよわあまたい我心の繪圖を見てし出すありそのたがはざる
 事をもつてしるへい

○本来もなきいにしへの我なれを死行かたもなにものをなし

いよしへもいまもかたらぬわれなれば我といふべたとのともなし

○世の中のよめがうとめと早なれを人をはとけにあるとはとあ

たつあみぞたへぬも同じ水なれを人もはとけになりやそ死哉

○ゆく水よすのくよりをとかあさとはとけをたのむ人のたらの世

石の火の火よりもむやきはとけをたのむとなとや追や付べき

○うるをつき地おくにおつる物ならをなきとつくるまやかいかいせん

しやろどの、まゝろと經になきものをどうりをどうて地おくふぞいる

○とへをいふとぬといとぬだるま殿心のうちお何があるべし

べつの事さぞといふをいやそむくつひよいひぬぬぐるま一休

○世中人のまゝろの佛されべしやかやあみだの入れわたと哉

いらざるとはとけも人をあゝまどさてまそ人のまよひこそすれ

○極樂も地おくをしらぬれもひでふうまれぬさたの物とあるべし

おとらくも地おくもしらぬこゝろめがどうえてけふぞもどの身となる

○人しぬるといあややきもしうづみをしのさてなくあると思へをまたなくならせして魂と

いふもの來世とやらんへ行あらおそろしやえんま王の手わたりちば娑婆あて作る罪をく

ろのねの帳につけておきて鬼に見せてこれはどの罪人ありのしやくせよと云時

ぬんま王といふと目なしどの、第一の臣下なりはあしもわたくしなふてよく善惡をあら

た先思のつなり能とをなせをよき事たり又あしき事をなせをわしき事來るありやさ

かおそきか其むくひかたちよのげのしたぶぶのよく毛頭もゆるさすつひにきたらすと

ふ事ならこれをくろがねの帳といふ是則人々の身よとなりたるわんくわれきせんのだ
理これを名付てゑんま王といふあり

○一休和尚の旦那に狗子佛性の話をさづけ玉ひしおこの人狗子とて犬の子ありこれ佛性とて
何とて合点まゐらすとすければ聞て見玉へとて仰られけると

犬け子あやかると人のまわさよと

はどけとをなれ地ごとくへせ入れ

むかひせれゝゑのころはまた目があかぬ

おつぼよまらを入てよろしくや

と仰られければいま目があきて狗子のところをうくわかりてひが趙勃の有無の處を千年
工夫仕へへとも愚痴の我等と得道仕る事はありがたしとすければ歌よみてさかすべし此歌を
常に吟じて心得て見られとて

なしといへとあしとや人のおもふらん

またへもぞする山彦は聲

ありといへをありとや人のおもふらん

またへてもなき山ひこの聲

とあそむしければ彼ものしむらく工夫してしをらむ有とをなきともしれぬものよて必さしか
とすければ

有無をのする生死の海はあまをふね

底ぬけてのち有無もたまらす

と仰られければ彼人此うたよて得心して一首

有無ぞしるなにおそひけん趙勃も

なりのりしささの犬の一聲

とすければ一休き、たまひておつぼのまゝをにくちまわりけるよとてわらひ玉へと旦那禮拜
して歸りけるとなり

○五しさは鬼どのが請とつてうすにてつぎ殺して又みにてひて人のたいとさうてしやをにて
つみの重死はどかしやくとといふ

五色のおにどと五濫なりこれも目なしどの、けんぞとなり常にまたくし有ていたづらも
のなり呵責とどどが心よ目なしといふ主人あるををしらす下人のいたづらものをたのむ

よ依て善しむし何かどうたごひかあまよよろこびとら立などするゆるよ其惡がかの鉄の帳ふ付るがとくわつてあしき事れみ來るなりこれが則ちのしやくありたい多の人の此いたづらもの、下人をたのむにうつてくるしみとるありたのひと五うんをわれとするをいふなりたい主人の目なしどのをしらざるがゆるえ

○またさるものいふふと毒藥へんじてくすりとなるといへば罪のおえきは佛にやありあにいふ心は目なしどのにあふたる人我すあこち目なしあどと知るこれを佛になる人といふあり其人は經念佛難行などもなす何の思ひもなれあり經念佛なども心あけぬゆへにつきのねもさと佛よやあらんといふりんざい大師のいとく造五無間業一方得二解脱と云々五むげんの業とと父をころし母をよろし佛身よと血をいだし和合僧をやより經像をやくまれをいふなり父母とと天地有無ありころすとと取ざるをいふ佛も經像もともにころしてとらざるあり解脫とと一切のまをひをとふさげとなる、をいふこいふまゝと修行の人佛をもとめ衆生とさらひ有無にかゝとる内といまた迷なりそれを皆まろしはてゝとらざる人を佛も成と説玉ふもへ罪のおもさり佛にやあらんといふあり○つくりかくつみのまゆみほどあるならん

あんなまのちやうあつけよるあし
ほとけをも鬼をもころすあく人と

○よくものをあんなるよ地とくもとより遠のちす
魚といふと罪曇なり一代藏經とみあ人間をいためんのためあけわらにくの釋迦どのやいろくのぎをむつてあめて

地ぶくも身心あわりくどんの釋迦のがへ名之釋迦いろくの經を説おるよのゆるえに地
あとのとるしみをうくるなり

○さて爰は頃しも八月下旬なれを大風大雨しきりにきて洛中の家堂社塔をそこねければ蛇川新右衛門取物もといあへす一休和尚へは見舞やて坊内あはざるの何とくこの外ある大風大雨は寺といづとをそこねやすしやとすければ一休出合たまひてよくあそは心付いものかあ誠あめづがした大風にてい去ながら當寺と何事もいさすとてわが宿は、しらをたてすふきとせす

雨にもぬれずかせもあたらす

と仰らざれば其は庵といづくのやどにてひどをすければ一休とらとせ玉ひてされをこそ大
事のよとをおたづねわれとて

とこの庵と都のたつみしうぞそむ

よとうち山と人わいふあり

と仰られければさてと喜撰法師と相住なされひかどたのふれけをいや喜撰法師ふかりて居
る也とありければさてと借家とのにてひのどすてわらとせしかを一休また一首をくみ玉ふ
かりの世わのしたる主もかりぬしを

かすとおもひすかるとおそとす

とよみ玉へと新右衛門此歌を感じて扇子をかき留かりそめに参りても得道の徳侍るとてよろ
まびて歸りけるが門より立のへりてさてくをかしたとふれ事仰られしにうかひすへさ
と思ふ事を打わすれかくすずに歸らんと仕ひ此心のいか心得すへさとて

吹とさばものさかしがし風なるか

ふかぬとさばにといつちあるらん

とすければこそまゝ返歌ありける

吹とささころうへさこのしき山風を

ふかぬとさばとふかぬなりけり

と仰られけきを新右衛門ものをもんとすうなづさて暫之禮拜をなして歸りしとあり
○それを誰とへをよしなのどのすがたりや

いふ心と一休釋迦をたらふくしかれとを我をまたとてとない事をいふたとなりあせおな
きは經れ文字の心をもつて迷ひをしらす何ををつて此有事をしらんや八万余經千差万別
なりといへども見聞覺知の四門を出てその四門のうへおわめて永く四門をとかれたるを
經の文字のとく義ととてみだりよ分別させまなきか爲とまかるむ一向に經をすて見聞
覺知の外は佛をもとめとされ則邪見外道なり人の邪見をおこさん事をおそれて又一休和
尙みづからよしなのととすかたりやと宣ふあり釋迦をしりてせんときき事をいふたあ
り法花經お曰舍利弗云 何名諸佛世尊唯以二一大事 因縁故出三現於世 諸佛世尊欲下衆生
開三佛知 見一使自得三清淨 故出三現於世 云々 知見とて見聞覺知ありまゝに尋して聞覺
を不説 開とて見聞覺知を則佛即心の光影なりとしるをいふなり然と見聞覺知の四ツと
一代藏經の要文なり是をのぞいて別は修造なし猶開といたどへと迷の人とわしき夢を見



てくるしむがとくそれとたそなは事なりと人のいへを聞入すもし又聞しり顔よし
我今頼に夢さめてくらたふ灯を得るごとくにて万法あきらかみ見るといふをいま
だねおとにて夢ありよくゆめの覺ゆる人のいふと我と定めよりねむらされを夢なしなん
のさむるといふ事あらん其とく性徳まよひなきとしるのみよまてのつて得るとなし
のとくなるを佛知見を開くといふなまよひの人と見聞覺知をとなるといへども一向
に捨て外をもとむとあきすといへば又とりてみだりよ分別する今爰に込見よとらす捨す
の事をいふ夢のうちの人よくさく只根本で作る土地蔵がねとをいふを見くさひさら
くと車の音よ目をさませ

○釋迦 出山語云

出山とせそん山入六年端座工夫じゆとして明星を見て元來まよひなきをさとりて山
を出たまふといふこ

○一佛成道

一たび見聞覺知を自性の日ありなりと識得れば方法歸一亦まもらすかとの如なるを佛の
妙道を成就とといふゆゑに成道といふまた佛の知見を開ともいふまた目なしになる人と

めいふ

○爰に西の國の大名身まかりける今端のと死よやすきけると我死去てのち種々の佛事をもつと
むべからず紫野の二休禪師を請して引導を頼みませ是より外に望みなしとて死たひける人々
なげきは遺言なれをとて急ら都へ使者をたて一休を請しける一休折節在庵おて易さとありと
てかの使者とらにうち連て下り玉ふ既お葬送の日限さくまりまかを音お聞へし紫野の一休
和尚こそ此國の某どのの引導の爲とて下向ありしとて國々嶋々より聞ほどの人足を空
よまどふて貴賤くんじゆし引導を聽聞せむとぞひしめける葬禮の儀式天に花をふらし
地おと錦を散て其くそはひ詞のべがたく其日よかれは數万の見物の一休の引導をぞ聞べ
けれどおしわひける扱玉のこしをかたすへけれを一休立出たまふ龍の前に一黙し玉ふ諸人そ
とや今やくと耳をたててゐるよ一言をいひたまふ天を仰ぎ口をくはつと開地を見て
口をふさぎて其まゝすつと退き玉ふ彼大名はれん中さ達をとりめ一門家來のともがらま
て是といかなるは事やらんせめてと一句をしめし玉これと衣の袖よすがりつと諸人の見物
も興をさましけを一首の歌をよみかさ都をさして上りたまふ人々是非かゝその歌を見れを
我はた後世のおしへをしらぬなり

あらんの二字のあるにまかせて

とありければ昔人これをきりてあともふもいこれざるは僧かなと黙して感じあへりしと

○又一休塚へは下向のとき淀の河瀬舟に乗たまひけるも乗合ふ山伏ありけるは坊と何宗ぞと問ふ一休われと禪宗ありと答られければ禪宗にて我等のと死とどくをあらまといひける一休やさるゝといのにはとどく多し其方には何ふてを死とくあらを見せたまへと仰られけきばいで我等が法力よて此船のへさき不動をいのり出しては目おかけんとて一ふちんがう二ふせいとかをこじめてもみふもんで祈りけきを皆々のり合れめれきも目とめを見合あるところよあんのとく舟のへさきわたちまら不動の像火ぬんをとなつてあらわれたり其時山伏ぢうめんを作りおのくおがみ玉ふのとすければ昔人ふしぎの思ひをさしけき共一休とさらふふしぎにもしまふさぬふりなりいのお禪僧かゝるさどと如何おし玉とんとせぐりかけてやければ我等が奇徳にて身より水を出してあれ火焰をえあつ不動尊をけきて見せん随分いれり玉とての不動の像の火ぬんに小便をしたたゝのしかけ玉へを火焰はそのまゝさぬて山伏の法力つきければ昔人一休を拜禮して奇異のおもひをなしける也さて舟より上り陸路をうちつれ行所あひ

のむよりなるほど大なる犬の山河もひいくをのりよはへかゝりければ山伏ややういのおは坊さきの行くくらへあまそまけたりともあのおそろしき犬のいかりを止めたい今是へよび寄る法力をあらとさんがは僧といのよとやける一休是といと安きとありまづ祈りて見玉へどのたまへを山伏大いらたの赤木の珠数をさらりくどおしもんで一のりよそののりける一切犬ははへやます手元へ来るねんもなかりければたつさまやよこさまかけて十文字犬のゝんをいめよわびらうんけんそどのくといへどを犬とはへやます一休おかしと思しめしとこのき玉へ某はそれほどの事よわびらうんけんをそわかも入事よあらすわいぬれいのりを止めたちまらふへ来らせんとふところをり晝飯れや死ぬしをとり出しかの犬に一目見せてよろくくどのたまへとさしめいかる犬おれをやらめし一目見てくんく尾をふり来りければ山伏をさをもをけし昔人さても格別なる心得かきと感せぬものこそなかりけり

○ 観見法界草木國土悉皆成佛

いふ心と釋迦目なしとのとまを得て天地方法と觀見よとくくみま目さしとのありと説玉ふ

○ 草木さへ佛よなるとされを人間はいふおよばすむかし昔あつた釋迦阿彌陀もみな佛老や

といふたがうこそつゝられたどのふ

いふ心不釋迦目なしの事を人々にしらせんとていととたれども見聞の人其心をしらすし
て言葉のざとむかりを取よつて一言葉も目なしのよひあてられされを皆うそと
又有ものいふとうそをいとすと佛とせせじとなり方便のうそと皆實なる故に

○うとふもまふどのりの聲

されとて詞をひとへふさらふにせわらず風のおる水のおとまでも皆めあしをあらとす
かり人のとをふてなど別あらん其外身ふも目見耳よきなどの事天地日月うみ山に
いたるまで一つとして法の聲なきものあしゆゑにうたふを法のまゑとあり

○柳とみどり花とくまきあむ

いふ心と目あしとのひとりにて能それく品々に別るゝなり自由あるとさなりもしわか
らずして一めんあらば目なしとせせじ善惡あくしてよく善惡をどのち萬もとのよそなれ
て萬物とよそひ分別なふして能分別し見聞すして能く見聞これあふゆへあれを目なし
どのゝ生國無住の國の人なきとなす

○あらむをしるれ春のけしきあやしく

目なしの、けしきあむしるれをなり何の心をなれあり

○本來生死をいなれたる身あれたる處もあく去處をあし三世不可得あり

三世と心はいまだあふらぬ所を未來といふおこつた心を現世といふあくなつた心を過
去といふ是を三世といふ不可得と文字に得べからずとむ心の一ッたくらぬ先を見る
に何ともいらぬ心なり是を何とも思ひとからぬ不可得の
を不可得といふあり云々と三世とをいふしるどもしらぬとも何とも思ひとからぬ不可得の
あゝろのかとらぬ心なり是を目なしといふあり三世たゞ一心と成がもあむ生死もあく本
來今もあく來る所もあく去所もなし

○混沌のいつくどとあく出ぬれむ

混沌と天地いまだわのらざるもあむ是則識前の心腑なり此ねをもつて平常つかひ用
るあり是をこんだんのいつくどとあくしるどもしらぬといふあり

○父母未生いせん本來もなくゆめく佛法とやらんいふ事もしらす何にならんとあんすべか
らすたゞ何事をしらす心が佛ありその佛といふそのと有にもあらず無あをあらすことりぬ
れば有とせなしとも知らぬ事なり一切八方余經を見るに佛とあらん心とすこしもなしとの

古曆など、同じ事なり

いふ所のまんどんの一步を得れと未生已前本來もよく夢々佛法といふ事もしらすたや
はらかよしてひとりしづかあり愛にいたりて一代藏經を見るにみなたとよどけ日記あり
もへにふる曆など、同じ事と、またまふなり

○爰一休和尚の末期の句とて世の人の口よまかせけるはその數多し是が實なり是之虚なりと
いふも不實なさいかにとあらむ彼もは影を書付て贊をもとめこれも贊をもとむと其贊ふ入出
るまふにあらばしけるとなりある處のは影の贊に

臘々而三十年 淡々而三十年

臘々淡々六十年 末期膾炙捧梵天一

此句々をわり又の語るは

借用や昨日昨日

返済や今日今日

借置し五つのそのを四つかへし

本來空むいまだもどづく

又ある末期とやらんに遊しけるとて人のいへると

生也死也 死也生也

柳ととどり 花とくれさひ

喝

柳不縁花不紅 用心く

一休題

○又ある人一休のは寺へ用事ありて参りけるが或夜沙彌小喝食をこまづけて一休のは遺言を
もそおがみ待しに一々名譽を極めたる事ども多かりし中よも自書自贊の影を拜し侍りし
よかうべといふにも長髪よして眼をさつと見出しらす赤き衣をめし丸竹の柱杖をつきいす
おましをかけ侍りし贊に

柳と縁花と紅

行脚事畢 今日時節

折主丈子 燒二六月雪一

虚堂之再來天下老和尚一休宗純末期書之

○又ある舊家に所持せる自書自贊を拜見せしとは是は蜷川村の卿庵に居ませし頃ふや是を長

我ど迷ひの身心をいふありとくると此身心と何ぞのなと根源をさぐりまじむるを
ふかりつてうとと上諸佛のしりごとと下衆生世界なりよくさぐりてみれたさぐらぬ先
は色身の有りとも無ともまらすたらしきのされきとのとくまりそよにてあつしつめたしと
直お境お應お事をお弁おでみぢんとかりもさまたけおし是さぐられぬ處こそれが則平常の
身心本性は我ありとしる是を名付て目なしとのいふ之此故おさぐられぬ處なりといひ
玉ふあり元より色身の身おもめらすたとへと色身の樹の根なり万法と枝葉なり本たつて
末おらすといふとなしゆる先色身をいふなり心經ゆいとく色即是空空即是色受相行識
亦腹如是云々色とと色身なり空とと本智あり即とと其まあり受相行識と幼心といふ心
と身心ともよ其ま取りおなほさす本智ありと説玉ふ古人是を心經の要路といふこそ是即ち
さぐるもさぐられぬとまると我ありといふ語と同一言なり

○心どいかなるものといふやらん

すそ繪よのさし松風の音

ふたつなまとのとなりぬて一もなし

すみ繪のかせのよてぞすし

○死ぬれん空々としてあるやらん

またなうくとしてなまやらん

死ぬれたとと疎お死るおとめらす目なしとのにお入と疎おとと思ふと色かたぢ
音聲とくく皆目なしとの、わざよて少も心なきなり心なきが故お死るといふと
目なきにやく成得を愛もかしこも皆目なしにて分て目なしといふは方おなき
ゆゑお有やらん無やらんといふありつこうよしらぬ事おていふよとめらす

○ありのみをなしとひとつのおのみかてくうにふたつればはひえおし

ありおしとなに名をかへて思ふらん見れとひとつのおのみありけり

○おのれさへつとよえらとぬ不動めがあくまのうよく無用なりけり

わやまうてふだうをよととおもふおと其心おとわくまどとされ

○ささおどのかた見よ石があるおらと五りんの代おちやうすされかし

人おたれ五たい五りんに化さる、五つをさうてりんのとあせよ

○朝つおときおのこりても有ぬへしたれかこの世にのこりとおつえし

いなづまののげふよさだつ身をしれをいせ見る我よあふ事おなし

○はらぬ井ふたまたぬ水の派たちてうげもかたちもあまらなく

うそをつかうとどしらするうそとまれをまことのめるまよとかな

○目にと見て手ふとどられぬ月のうちのかつらのことさ君にぞありける

とれと得すとききてとやきと矢のとくひさのへし見よゆみとの月

○萬法を見る水よどおのどかわきおそとて水をいくらよのむ

四つのうをたれ一口おのみつくし今どしらすよそのとあまをひ

○釋迦死んどのの處にまかせて佛よあるといふしるしおしどかく不明なり死すれを我もあし

人もあし、やかみだも見きともと人の性をうけつぐ地獄おぞ入

さんかいとといろくの法を立さまぐの行法戒行おさする事之死すればと悟れを

といふ事ともおは我もあし人もあしとありいふ心ととどりて後さんどのの法をみきとそ

でもあま事あり釋迦彌陀も、ととよく目なしどのお成得すしていろくの死んかいをし

て地ぞくにいろといふなりた、人々よ文字をとり苦行もせましおためおいひた

まよきり

○夜もすがら佛の道をたづねまばわが必よそたづね入ぬる

いかなればたづねくてわく山は道さかたよ安くいるらん

○おをひいれと人もわの身も余處ならずまよるのはかおまよるなけれを

かへりつ、また立かぬりよく見きをおもふこよるもそのまよるのな

○心とてげもまよるなまきものをとどり何のまどりあるらん

おとらぬもまよるも同じまよるなりとらぬもまよるなりとらぬもまよるなり

○何事もひなしき夢とまよく物をさめぬこ、ろをなけきつるかな

さめぬればさめぬされこそさめつるよさめぬまよるのなをゆめならむ

○わか法をいとでもいらぬ春のとなもひらけてちりてつちとこそきれ

春くまむとたちる花をどくのりをまきのぬと人のあるもあぞかし

此本歌と文の終の言葉なり佛の常樂我淨をよめり是一卷の流通なり我と我淨なり法

とと常樂あり歌のまよるとこよもかしよを我法あるゆゑにいとでもいらぬとなり春のと

なのひらくそちるもつちとなるも皆常樂現前のごころをいふなり

○一休のはまよるざしをたもひ見るに寒山子の風相にのたる事あり寒山師の詩句あり

我心如寒月 秋水清無底

とありしが一休の道歌よ

我ころろそのまはどけいさほどけ

あみをときてきて水のあらむや

とよませたまふよを寒山子の詩の心より寒山の文珠ありといひ傳へしが一休と定めて普賢な
るべしされを狂雲集お其詩文多しといふをまた人々の目よと見へぬをにへみて其中より金
づんやの耳へも入やすき詩を書ぬき盲の目よも見あはらむへさひらかなあてしをりつ子供
にを覺へさせ大人にも未だえらぬ人お見せ侍らんとつたよとをりへりみず仄平をひきまへす
人の書あやまりをもつてわがあやまりとす我あやまりても苦しうらすうくあん出しぬ

一休和尚在詩二十首

題二鉢 敵一

畫不笠 今夜不齒

瓢箪叩 龍有 何益

題二影 法師

元來有物 不離身

東西南北自由身

花發十方淨土春

揚手同揚 伸足伸

起居動靜 似侮人

全牀分明 無二面目

今日彼岸 欲開鉢

無衰無笠 又無杖

往昔江南 沒落時

欲問二橫 斜疎影古

獨臥寒衾 患二機千

夜深依被 半風食

一一生忍 衆動焦身

入道修行 若時事

女淫

須臾老去 革頭巾

八寸推根 尙勝人

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

起居動靜 似侮人

餘身貧乏 雨晴稀

結句食犬 引腰飯

起二青道 心成法師

伊勢壺底 暗皺眉

余身極貧 有誰憐

天至曉鐘 未作眠

八寸推根 尙勝人

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

須臾老去 革頭巾

元來海口更無言
一切衆生迷塗所

百億毛頭擁九痕
十方諸佛出身門

紅顏綠髮冠沙喝

况忘御年十二三

若有貧僧憐愍怒志

察前吹味致推參

少年其

一笑紅顏花似開

木石無心多世上

嗚呼是此玉瑕哉

若衆天然好富貴

摺切爭可入御意

無酒無茶又無餅

山僧風流只文字

看書忽忘七佛師

雲鬢彩鬢少年姿

手中經卷是何字

定有愁人小艷詩

贊三阿彌陀佛

汝是桑願

一人不救我無一願

萬民不泄

贊三大黑

大黑尊天其面

諸人信仰置棚陰

平生愛鼠是何事

足下米囊無用心

贊三布袋

善提煩惱

匪裏乾坤

寐寤恒一

佛無虛言

青地扇切箔

本真白物染青々

日本晴時如見星

又有假茲思出事

宇治川畔亂飛螢

八島之壇浦合戰圖

射手名人能登守

兵法達者源九郎

秋風有恨八嶋浦

狼藉忠信亡菊王

一谷合戦圖

二百六十

万騎下山源氏兵

平家運出堅城

長江不洗英雄恨

日夜風濤戰鼓聲

源九郎洗弓圖

漫々滄波已落弓

恰如初月掛晴空

忽伸左臂取來者

天下英雄在毅中

熊谷招教盛圖

生年十六美男兒

身命碎珠回馬時

熊谷道心從此發

法然庵室念彌陀

佐々木四郎宇治川先陣圖

萬騎如雲字水邊

東關諸將各爭先

功名雖出四郎上

一馬化龍何着鞭

右

一休和尚往生道歌百首として

阿彌陀佛とこれと即ち去此不遠まよへて途のたゞみこそあき

○三國の法とまきく多けれどいやかのをいへみまさをるぞなき

○歸釋道三ツのをしへの別ならず善に善報あくは悪報

○ひかしり智慧ある人の佛道と二世あんならくのをしへとそある

○三ぶくの世々のいよき君臣おしやかのおまへを仰がぬはなし

○三寶に歸依する世々のいよめしみよこく土あんなん土民福樂

○一心にまことの道よいる人のその行とへと子孫とんじやう

○公家武家のほだいな信する手本おとらまたり大臣多田の満仲

○道にいるすゑとん玄やうの例おと藤氏源氏の家をみてしれ

○せんぢやうと忠孝多しとんせいとげまたくひあさわのさものいふ

○そのいふのどんせい修行手本として西行法師さてとくまごへ

○今も又十緇八素の友がなしろさんのむのしおもこれぞする

○とんせいと不遇の人とさあめあちめあどげてがだい入とうとんげ

- 大唐の如福禪師と樂天とをよ念佛座禪とをさく
- 熊谷がとんせいしゆ行功德みよれんまん平等自他の成佛
- 四大五瀝みさくうふしてやまそまよとの念佛座禪とそいふ
- 家より不忠不孝のともがらととんせい修行あやしうりける
- 成佛と異國本朝もろとをよ宗よはよらす心よそよる
- おや主お忠や孝ある人々と家にありてもがだいたのもし
- 萬法の行とよろづは事あをこゝろく道をつとめよ
- 世そののれ修行れ道と別でなし智者愚者とも座禪念佛
- 貴賤知愚僧俗男女別かれとぼだいの道とひとつ事なり
- 佛説とぼだいなねとんの真理よて二世安樂のをしへなりけり
- 善修すれどあく事きたると恨あて先世さいがう即爲消めめ
- 昔人れねはん常樂しらすして生死無常をあげくわこれさ
- 佛だに定業ののれ玉とねとくやくいんぐ世のむくふ幸
- 佛性と不生不滅の物あれをまごへを生死流轉とぞしれ

- 何事も定業ありといふ人をまごのときははかどろたぞとる
- 佛道ふさどれといふと何事ぞいんぐわがだいを得とくするこ
- くの常又工夫觀念つとめあをまごのときあ心うおらト
- 智慧あるは若も道をつとむるよ老てぼだいをしらぬおろかさ
- 人たたい平生志願あかりせを修身齋家もいらゝあるへき
- 何事もせんせのがうといふ人のぼだいつとめぬこれを猶ぐち
- 我等今悲願祈誓をとるをみて有爲の法とてとする佛陀や
- ふくとくとねがふお来るよさわいとつしむらとよ入ぬとぞさく
- 一さいの諸ぶつがさつもひくとんよりがだいなねとんの成就し玉ふ
- 一念の中よりまよふ雲おありんる永劫やみぢとぞある
- つらくとめうりもとむる人みれをトむある人を佛あらまし
- 神儒佛みつのをしねをどく人の何れれ道をいらぬあさまし
- 一念のじひ眞實ぞたねとなる上品れんげひらけあそとれ
- よの人のぬんぐわぼだいをしらすして五ぎやくのつみをつくるめとまど



- 戒たをちぎせんねんぶつとめつ、じひある人と佛ちらまじ
- 比丘の其身のつみと扱おきぬ人れ道心やぶるうらめし
- 當來の三會のはるの花をまた現世のじひをたねとあらま
- 世中お我そさどると自慢して名利もとむる人れおほさよ
- 正法の花ぞの、山の草や木をむらのはるとなまよまものあ
- 名と利とをもとむるとれとげんやあ人よつかとれさいよつかわれ
- 今とて天地のみちのかたらねをまつせのわきらなだ頼もし
- 財寶と身のあだちりと聞あがらあほも、とむる心とかさ
- 釋迦も又あみだも、と人ぞのしわれもかたち人ああらすや
- あくねんのおこまやすくてじひーんえおこまおたきぞのうかりたる
- 道とたいせけんせ外れとをせにトひしんじつの人になつねよ
- おくらくせぢおくもわれにあるなればあくねんおまるこ、るせいせよ
- わが氣にたとむ入ざるとありと人れいさめを用ひしたるへ
- 人れ非としの安けれぬのが非と智者もあることのたきと聞

- あまを人のあゝろおさかよまそ世法佛法さわりなりけり
- 身を入れて鳥けだものを救ひして釋迦のあんちの修行ありけり
- 眞佛と有さう無相あゝはらず四相なきこそむさう成けり
- ぼんのふをそくがだいでとあすそ一ねん廻向のうちああり
- 賣僧して物とりくるふ沙門よこれぢぢくのをすどこそあれ
- 本來のむーん無さうの佛をも五とくにひかれがんぶとそなる
- くわいなる沙門をみれを皆人れめうがーやなりといふぞおかーだ
- 躰ありてがんぶまゝのありせと本らいくらのむそら眞佛
- いまどきの僧は中々俗よりもいんくとがだいをーらぬ佛だら
- 戒たもち座禪念佛つとめてもトろはーさ造地獄から
- 儒佛道おしぬとたどひ得せずとも生死大事とおそへ人々
- 物とに執着せざる心こそ無さう無心の無住ありけり
- 皆人あおーへの道にまかせお心本來空にのへりよとすき
- みち人のどんじんぐらの惡水と三づの川のながれとぞある

- 生と寄死と歸るぞといふとはふるさふみにそおはくとへけぞ
- 六根につくるさうくとのちかはとり四手の旅路の高根とぞなる
- たひとたいうき物あるふふる里のそらふのへるをいとふこのきよ
- 極樂の月まつ夜半の念佛こくをきりころふ秋のにー風
- 障なく木來空にかへるよこれや西方往生とーれ
- 老の身の月日をかくる所作とたい香花よきく玄ゆ座禪念佛
- 西方の本來空よ往生ーひとやう壽佛とあるぞめでた
- 口はどお身の行ひのならざるわが心よとぢられそぞる
- わが禪とおしほの外の宗なるお往生要歌とむもあーだ
- とが禪おたらふべた法わらざれをよるのうちおーもつもな
- いふーへのちーきのをーへトひとのみいまとなよとてがまんけんどん
- まやとたうりいたたいけ夫人極樂へまれぞ佛のとうぎせつば
- 佛性と四大和がうの躰なるお五欲のちりをいふ、引けん
- 佛乘をせち弁僧やわる知識世わたるものとするそかなしき
- 妙よーて神あるそのとまゝる哉天地にわたのみトんおせい
- 不義にーてあつめたくとふざい寶とつもりてのふは二世の身のあだ
- 心より四聖六凡いでぬるお何とてたーおがうば作るぞ
- 名と利とにかゝえる心引かへてまをつさば二世と安らく
- 何とも今日の歡樂すぎぬれを明日とかあらずくげんとそなる
- 書寫寺の僕のおるもの風とりむのーの僧今そまひーき
- 現在の苦修善行と種となるかあらず來世安樂のこれ
- をーなへる道と世外も事多ーたーん實よ慈悲をたすね
- 罪障の露霜ふかさ身にそた、座禪念佛題目とよ
- まつーまやみなみの海も極樂は池水と同じ法の陸奥
- 十方は唯一心の淨土なれ衆生とつとめ己身彌陀佛

已上

眞珠巷と末代まで出世すべからずと仰られ和尚自の一代にも出世とまをまといりければも出世の法語をもと名譽あるを書置玉ふ和尚號と贈號なり自のたまふと虛堂の再來ありと其外ふしぎ

なる事を書れり玉ふ事多し又遺言の如くに我死て百年過ぎて唐土より禪師きたらむ我再来とねもへまた二百年ふわたる年我死骸を土よりほり出し見るべししかたは朽たらばいひ置し事へ皆たこととおもひて火中とべし大かたと死がいはそよねまじとのたまひしとなり然るに百余年にして隠元來朝ありこれ相違なき隠元和尙と一休和尙の再来なるべし、あらむは死骸とても定てのわり玉ふ事あるをなきなり又今の木像とあるかの、ちの作物にて諸旦那あるひと弟子衆まで一休和尙のほそり髪を守袋ふ納もちけるが彼の像を作り奉るとは長髪の跡あればとて直のほ刺髪をほ眉は髪おいたるまで佛工が植けるとありさてそは刺髪をするの代の我々拜し奉る事有かたからすやさてかく集めぬるに昔の人の書誤るも聞たがへるも有べけれども今またつたさう筆お記したれを猶あやまる事も多うらめよとわがわろかある故ぞかしゆるし玉へ必しそ古人をそしり玉ふべからす此書と兒童がひる簾の伽となし玉と、おのづから耳底のかそどもならむあしきかすよそあらざらめかくいふねろかある我も筆記せるまよ〜におれる心のちりさへひとつ二つと吹えらひ一休和尙のかす成とそとおもふのまよに

鬼の目にきみだど何の涙ある

ぢごくの釜の下がくすがる

みごけたい力まふしお實を入れて

地獄の鬼にまけて歸るさ

平田止水居士輯
源 基定補正

一休諸國物語圖繪拾遺

薪村酬恩庵記事

○一休和尚はまた若くまじませしと死山城は見物のため大徳寺を立出たまひ南山城た死いといへるにいたり玉ひしに古き寺一ヶ寺あり寺號酬恩庵と申しぬされども此寺久し之絶て住べし僧も無ければかのづから野干の住家とありてふるき苔と壁を閉ぢむぐらと軒をおほひつゝ物すさまじき有さまあり所のものども集りやけるとかくまでゆれとていはた住べたといへる僧のちたゆ多かりしるるべき僧をわらたまねき此寺へすゑや度と彼やこれやと所のそのつとひ来りやければ和尚つとくと思し召さても風景といひいふもおしした寺あり我にあたへあむ住おほすべしとのたまへを里人言葉をとろへ是まで住べきといへる僧達六七人もいろくとしてすゑは得ども或と夜のまに身まかりまた入行衛をなくなり種々のわやしき事をかり多ければいよ／＼里人とても盤だに行かふとあくわれとていひとれたをけを一休つとふお聞て苦のらすいのに我住おほすべきわたへよと仰ければ里人ども口々よわかさは僧のいらざる事といひける中よもいやく／＼禪僧と若きとて年よぐるべきとにぞあらずといへる者

とありければしらのを貴僧にまのそべしとみなく／＼やければそまかしことば覺ゆりいひのさましれものゝ住そと覺ゆるそとてやがて出たまふ在所のものどもこれをさうていよ／＼おれまであやしきとの次第をのまらずや上さまく／＼制しといめやせをたい我にまかせよとのみ仰たまひたいひとりすお／＼と荒はてたる古寺のまをらなるよ其夜かすかある燈灯をのみ便にて夜のふけ行をまらたまふするに子の刻をかりとねばしきとき寺のうら震動していなびかりすさまじく鳴のみれとき音して年の程と二八をかりの女いかに容顔美麗のすがたにて忽然とあらとれて一休のほそを近歩歩行よるととき和尚すましも騒ぎたまとす大かた心得たるそ、おを去よとのたまへむとあく消うせぬしとらくありて同去年おろの兒銚子のとらけを持その夜さむに酒をすゝめたてまつらんとたわふれてほそをに近ふあゆみよる一休少しもおどろかせたまとすさいせんのものよ又來るかどのたまへを是を同去之さへうせぬとのふするうちはとあくすすで丑の刻をかりと覺し死頃寺内ゆるささわさわ稲びかまますく／＼すさまじくてたけ一丈むのりの法師おせてえわうだんを病ものゝ如さかほめて眼と朱をぬりたるが如くおそろしきわりさまめてひらり／＼と飛めぐり佛壇の下をし死りよ／＼らみあがめたり一休得と御らんとて三度まで來るとまらなるのあれとやく土底へ歸れよとのたまへを早もさむう

せぬほど早くはのぐと夜もわければ在所のそれとも大勢がさそひ合かの寺へきたりさて
 もいか成一休とて定て變化のものよころされ玉とんことこのむざんさよと念佛あやして一町を
 りりもへだてよふるひく和尙とおとすか一休坊やわたらせ玉ふかどくちくぐあよむ
 れをそのと死寺の戸ををひらき門の外へ出たまひければ一度にきつとかんじつしをしと
 ありもしづまらずさて和尙様をたぐりあして皆々寺へ入にける一休のたまひけるとまづ此寺
 をくづま佛壇の下をふかさ三尺と一間四方を掘て見よとのたまへを在所のものをとやける
 と仰よてい得せも此寺と年久し死と承ひ殊に故ある寺のよしやつたへへをこぢちやさん事
 いかいと言葉をとろへてやければ一休聞たまひさほどおしく思わを此寺をくづし其あとにい
 かあるのらんをを我建立とべしと仰ければさらを仰お隨ひいんとて人々あつまり寺をくづ
 し佛だんの下を掘て見ををながねをつめたる壺三ツまでほり出しける其金を一つづと地頭へ
 進上しひとつの所のものへ取らせたまひ残る金あて善つくし美つくしたる堂塔を建立したま
 ひいとなり其時より酬恩庵を大徳寺の末寺と定められて此寺又一休和尙住せたまふ事とし久
 しかりける今の世おいたるまで一休和尙の隠居の寺とやしさるよよつては眞跡靈佛靈
 寶あまた有ける山城大和奈良までも眼下に見えらし絶景諸人れ目をおどろかし好士のその遠
 きをきいととす歩をとよび春と、な秋とをみぢあるひと松茸のりなどよて群をなしけるどの
 や

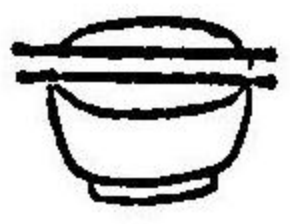
地獄の問答の事

○一休かひのくよりしむらくは逗留のうちに地獄なといへる高山あり古跡も又多ければ一見の
 ために立出たまひけるを所の地頭かねて當話よき事をさし直お聞きはしくわざとどづの供
 まとりにてしらぬ躰よて近く行むかひそれなる法師よ地獄極樂のいかにと問ひければ一休ま
 きこに角をたてて糞をくらへこのたまひければ地頭もつての外又腹をたてよく坊主の悪口
 かなものないとせそいましめよと下知すればかしあまつて若葉を走りきつてさんぐお打
 すへ高手小手にいましめければ一休自若として地頭よむかひ是も地獄よどのたまへを地頭
 心つさわりて馬より飛下り手づから一休のいましめをどきさてても有がたさは教化かなど
 禮拜し則わが乗たる馬又一休をのせまいらせ私宅へともあひ歸り種々の珍味をそなへ朝夕そ
 をを離さず馳走いたさるれを一休これまことの極楽なりとのたまひけるとのや

文字の顛作の事

○一休和尙は養生のためとて常粥をまわりけるところへ長谷川與吉とて小さなしき男参りあ
 二百七十五

とせては相伴いたしさてく和尙さまへ此かゆに付ては尋中上たき此かゆとす文字の両
 じきよ月を書死中よ米といふ文字を書に子細こそいわめ我等ふしん至極にぞんじいそをが
 ゆとやその水の中へ米を入れしるくやならかに焚たるをかゆとやかれをさんすいに米とか
 あるひと食篇に湯あど、よそ書べたものにて侍るよいのなる子細にてかやうる書ややらんと
 尋ければ和尙こたへて宣く此字の子細こそわれ昔大唐お神農伏犠とて聖王おひしけり其頃迄
 といまだ文字定まらず米食あきの文字とあれども粥といふ字なのりしを伏犠神農其外あまた
 聖賢たちを集めて米を水の中へ入れしるくやとらうに煮てをちゆれを腹中とのひて消やそ
 たものあきをも此文字いまだ定まらずいかいに造るべきやと有けれどを何れもわたまをのた
 ふけさまくと思索し玉へを思ひ出し玉とねを案トわづらひて先々かゆを焚て人々よす
 め玉ひけりされども誰わつて思ひ出し玉とされを神農うつともの上箸をからりと置せ玉
 へを月のやうよ



かくのとく見ゆたりさてあそとて阿わたり月を書て中よ米を書ありとこたへ
 玉ふ奥吉手を拍てやけると天晴ほどんさくにてましますいかさまゆあき事
 よてこいまし何をたつねや上てをらちわけ玉ふ事とて阿々と笑ひけりされを此かかし死

につけて又不審まそいへ只今のとくわらふといふ字を竹冠お犬と書こそ心得やすすらふと
 いふ文字口篇おひろがるどか目篇に敵あきこと書べき物にて侍らめ竹かひりよ犬といふ字
 いかなる子細よて書やいぞと尋ければ一休聞しめして仰けるおは是るかゆと一度に作らき
 たり笑といふ字をたくまんとしてあまた聖賢ならび居玉ふ處へ少死犬かしらに籠をかぶりてお
 どけ狂ければ人々一度おど何と笑ひ玉ふ其故にま右のとふりかくとれたまひけるいかさ
 まいこれを承れおもしろ死事かなどかんとける處を和尙みすましたりと思し召惣体文
 字といふもれ一々く理をせめたるものにておざるを日用よみなく書ねをならぬ念とい
 ふ文字の中にもよく作りたる文字あて観音經の中にも金銀琉璃神珠など七ツの寶をいひな
 らべし第一番に金銀といふてある其金銀おれども持べき人がもたねを寶ととならぬ依て人の
 いふ字の下よまといふ字をかきて金といふ字に讀す何とくうしたるものでなぬかど仰けれ
 を成程どいひおながら此男を何かなどんをつきたく思ひて和尙さまは尤の仰あがら草行での
 くときはいかにを人のまにいへど異字で書まると金かやうにかきまよれをまといふ字とこ
 少しちがふやうに有まそがいかにとすければを其不審となくて叶はぬとまろそまが第一
 の意のつけどころと一日もなくてのあらぬ大切の金なれどもしんでと身よつかず入らぬその



花
かきりぬ
うづりのかげ
うづり
うづり
うづり
うづり
は印



かきりぬ
うづりのかげ
うづり
うづり
うづり
うづり
は印
俊成

とど仰られければ扱をく渡とかあるはたづねをヤ上一生の寶を得たる事とを悦びてこそ歸
けれ

天狗問答の事

○一休常陸の國のいまの宮居一見のあめ參詣なされけりすでもは社ちかき歩み玉ふにしげりた
る森の木蔭より何ものぞを知れず丈々七尺あまりの山伏つと出來り和尚よむかみて佛法とい
かよと問ひかけられと駒よありと答玉ふらち割て見んとて氷の如くなる刀をぬたて心もと
にさしめてけるに一休とこそまもつわが玉とす

春とにさくや吉野の山ざくら

木をわりて見よ花のありかを

と古歌を詠じ玉ひければを變化のその恐るけしきみて何方ともなく消せぬはともめでたき
歌よこそわれ

輕口問答の事

○甲斐の國へ一休は下向のとき所の某かねて和尚の答話よ死とを聞およびし故一休の頓作を
まのあたけお聞んと思ひめしつらひの童よれしぬいひけるよと和尚こゝをば通りのとこ生徒

庶のどたいかんとやせ和尚あふとか言句あらを喝といふて立されよといひふくめ教ければを
聞なきぬ言葉なれを覺がたき良見はけるゆゑかさねていふまのせけるよと生の字とあまど
いふ字あるぞ恚庶いもをいんとえねたるものと覺へよとねんおろおをいぬおき一休のは通
りをおそしと待たる所へ和尚何心なく通と玉ふをかの童かけ出てなまのいもの時かかんとど
ふ一休取あへず表てもとし焼てもよしと仰ければをしのとく喝と應ふ一休こたへてるぐひ
かど有ければ某どのもをかしき中お頓作ある事を感じられけるどのや

蜷川秀句問答

○一休ひぬい山へ登り玉ふとき蜷川新右衛門といふものは供やされける折から彼山へのりし
頃和尚さまへや上たき句ふどうかみひ問やて見ひとんは付被下とて

ひぬの山路をひろひもくかあ

とひそとてぬに

さしとけてふもとに四貫の錢をばらり

とつけ玉ふのくわちとやさは頓作にてぞ有けるそれより山よのぼり玉ひて種々の詩歌あり前
に出したれを
しよよ零す



一文や二もんと思ふなく阿彌陀も銭で光る世中

金持を十人よせてながひき在中に五人の無學文盲

一 蜷川

赤飯の答話の事

○一休和尚したしき在家へ出ありしとき折ふし到來せしとて強飯を奉りけるが亭主こびたる
 そのにて兼て和尚の答話をまゝる見んと思ふ折のら幸ひと出しけるは遠慮をさく手づのら
 よざりての喰ひ握りてとくひ好物のくしにてした、か召上られけるを扱こどとさ折からとて
 和尚さませだんちれをひさどの胸の通るまど死あそあつよまゐるといふんといふ一休そら
 さぬ風情あてひたそのまゐりけるに亭主したりに一句あくしてまゐるこせんあしいかあく
 どせめけきを其時和尚答へ玉ひけるここれ見られよせきとんと聞からによざりかため手形を
 つけて通をはとふいくらにても通ること仰けれ亭主を理あ折てあされとて赤飯を他よ
 りもらひなごらまゝる見も得せざりけるどかや

極樂の沙汰の事

○一休の住寺へ日頃出入りける白俗あるものた一向阿彌陀の淨土に生れん事を願ふまゝ
 ふかよりしもれありしがさるほどに當時の名僧とさけを八宗九宗のへだてあく足をそらさ

おなしあなれたあなれへ参りつゝ極樂浄土に生ぜん事の沙汰のみよ日をくらしけるあるとき一
 休和尚の此寺へ参りやけるそのれおしり淺く思疑暗昧の身と生れいへどもたまちがたき
 佛性を具しや上といのやうに修行仕り來世のならす極樂國へうまきやたくとぞんじやと
 誓願ふかくいふよつて四方の能化たちへ参りていうけ玉りいふ他の師の十萬八千里のとき
 さあなれに極樂ありとをしる玉ふふ一休さまよと地獄ぶくらと目前ありといめし玉ふ遠き
 道ればおにひ得ば百里や二百里のちがひを有まじきよといとゆどもかやうお大相違あるよと
 某まよひやい問あこれ此上のほとひも實を示し玉へとあまたをあがしくとさける和尚聞
 しめしされを迷執ふのさものゝ爲おと十萬億土と説き悟了通徹のものおは目前と説きは極
 も去此不遠とあるとあふありとのたまへバ俗のさねてやけるあわかやうに丁寧おしめしを
 承りいへども終に七寶莊嚴は極樂いのはと尋ずても見やたる事なまほほどおとてそのは悲
 悲お今一句ねんおろお示しにわづのり度こそいへとこふ一休さこ一めしされをこそ極樂目
 前おありといふと七寶さうおんのかたちあるにとわらす人の爲に口よ説てしめす極樂にあら
 ず人と自己に言句をはなれて悟り得ずんをしるとなししをく坐禪工夫して見付くと仰られ
 ければ恙あしとて家にかわり襖をのふり晝夜わん々暮し明して不斗あたいしくを和尚の

寺へ参りため息をつきさてく目前の極らくよ見付いへとてても多も衆生の迷いと知ら
 ざるよと不便のといひへ此度は悟とひらけていとして笑をふくみ小ををりしてやける一休聞
 てさあそあらめあゝろの面目だおひらけなを何のうたがひか有べきと去ながら其方の明らか
 やうといかんと、ひ玉へをささむと此極樂とアと實賤富貴にもぐらす老若男女の隔もあく
 朝夕さうりよある事よいといふ和尚打うあづさをつとよくよき心得かなさて其極樂は朝夕
 安坐したる心入いゝんと問ひ玉へをされば其事にては美食蔬飯よかぎらす朝夕のこくを樂し
 みまたぶる所こそ極樂よていよとささ自慢らしくじうめん作りてやけれを一休も手そうつて
 わらひ玉ひけるとかや

俗より弟子を頼まれ玉ふ事

○一休は旦那におろなる者ありける此者折々まわりては物がたりを承りけるおあるとき一子
 出家とれを九族天よ生ずるといふ法語をうけ玉りて深くしんぞ只ひとりの子をもちたるの
 此小兒を弟弟子おあし下されいへとてつぎ來りける易き事なりとて直さま髪をそり落し小僧
 となしのしらを手よてさらりくおでまとし玉へを親と何ぞ有難きは引導もあるべきと耳
 をそまして開居たるよ和尚作り聲してさんおなをく牛のさんよあれくぞ三べんまでのた

まひけれど親案に相違し大い腹立して是と曲をきい事をのたまふそのかな佛までと得ならずとも菩薩にふれとなりとも定てわいのたきは引導を有べきとぞんじの外ある牛の陰翳になつて何の益かひぞやとて一休をしきりお白眼ける其とき和尚うちわらひ玉ひてされを末法の出家の行ひ難くして落やすしさるるどお牛のさんとぶら〜と落さうに見ゆれども一生落たるためしあしさるによつて斯といふありと仰けれを彼旦那何どか心つきけんいはれを承れを面白わいがたくいとて一子を連れて歸られける

天の笠を着玉ふ事

○關東より一休は上京の折から然るべき大名と覺しきそのとわじおなり先おなりて登らせ玉ふ頃しも水無月のすゑつゝのたをれを暑氣とあどだしのりしかども笠をもめさず歩行玉ふかの大名もよゝろやさしき方よて使をもつてやさされけるはのゝる炎天には坊となど笠をめさるるや幸に持し合せたる古笠ゆゑこそを着せらるよとて笠一かいさし出させければ一休も禮を正しくして宣ひけるは心ざしのはと近頃祝着やていしかまながら此法師の天をかさに着しひへハあつくもぬるくもいやすとのたまふ使の者たちのへまのくと主人もや上ければ大名をいかさま此坊主た一人にていあさどとて必ず馬つけけぬげをかけぬやう日蔭をよ死て通せくと

て猶も同道やけるさて留りれ宿をせはかまひあく同宿せ玉へとすつかとしける故程あく暮よ及びぬれを同一宿に泊り玉ふ其夜かの大名のほうより使をもつて中送られけると晝のはど笠を参らせんとすたる者めては旅と物うさもふていとみ此おろの暑さよさこそつかれさせ給とんは酒一獻をゐらせんこなたへ入らせ玉へと有ければ一休過分の仕事ありとて使を案内にて行せ玉ふさて奥の間へ通り玉へば大名聲をのけ玉ひていかお坊よ和國のならひ人よ逢とさは笠をぬぐとこそ承るよなにとて笠をぬぐせ玉とぬぞとやさされる言葉の下よりぬぎてもかけおくべき處あくいどのたまひける扱あそ一休和尚よとすれし参らせいよく種々ほちさうやさされけるとかや其席さまぐのにおもしろき問答など有つれども聞もらしぬ

稚ら時引導し玉ふ事

○一休いまだわづか十歳のほどき師の長老田舎へ行玉ひは留主の處へ旦那うちお相とてたるものありいそぎは引導被下度よし使す來りけれを他行にていへと歸りの日限をいれざるよし返答ありしおさしへを弟子がたあても苦しからず是非々々とおして頼み早死人を寺へ昇込みける折ふしおどの弟子も居あひせざりけれを一休さも一ゆしやう氣に用意しさて棺に向ひて死人をゆびさし次よわの身をゆびさし又両手をむろげて何のまど葉をさく喝とぞのた

まひけるかゝる折のら長老の俄にかゝり來玉ひて物かげたり此有さまを見玉ひのち此引導といかある事そとありければ一休やけることさんい死人をゆびさしたると汝が死たるゆゑよと事そ色がしを指さしして此小僧にと事おて剛手をひろげたと大なる恥を我よのせたるぞとやたる事にていことよたへ玉ふとあり

泉流塚にて遊女と問答の事

○一休和尚さかひの浦に越ありと死其處に旅客を宿とる家居のうちと地獄といへる遊女あり此ものかねて一休和尚の名高死と一り一首を詠し奉る

山居せと深山の奥に住めよのしよと浮世のさるゝ近きよ

一休其まゝは返歌

一休が身をば身ほどに思とねを市も山家も同じ住家と

と返歌し玉へどもふいつたゝならぬ者とねばし死しあたりの人よいのある女と尋玉へをわきこそ音も聞ゆし地獄と遊女なるよしすければ和尚其まゝ

聞しよの見ておそろしき地獄のな

と遊しければ遊女とりあへず

しにくる人のおちさることをし

とよたねけるどのや

乞食よ小袖を玉ふ事

○一休極月の末つかた東山よし田といへる所へ越なされけるかへるさお今出川口の川原に丸裸なる乞食の伏し居たけけるをばらんぞとさても不便の者やとおぼしめしは小袖を一重ぬぎて取らせらるゝに此乞食とろふよけし死なく袖うち通しきたりける一休仰けるとさてもふしきなる乞食哉一錢だにもいたゝ伏おがむ乞食のならひなるによるこふけし死も視ざるを嬉しくもおもとざるかと問玉へば乞食こたへてやけるといふとわきお小袖をくれてうれしくを思入ざるかどこたへければ一休手をうち扱をわやまつたり一大事のさとりふまかりけるぞやいかさま此乞食がひ人となつた人ふとよせわらと愚僧が愚痴をこらしぬるまそうれしけれとてたきでゝろを合せ目をふさぎておのみ玉ふ其うちにも乞食と消うせけん小袖をかり残りける不思議なりける事どのや

大和岑の薬師は利生の事

○みねた薬師は靈驗あらたあるは佛めて願ひあるをわらざるも参詣の人たへざりけるあるとき

瘡を病る人ありて七々日のあひだたし参りの願ひを立て毎日くおまたりあくまうでける
すでお四十余日に及べども其しるしあかりけれを如來を恨みたてまつりてさんぐも悪口し
ける折から一休和尚のほ下りと聞しよりいそぎは迎ひお出てしかくのよしや上けれを和尚
聞し召志仰けると如來のれいげん無にあらすたいなんぢが身を恨むべしさりあがら我いの
り見んとて狂歌一首あそむ一薬師へ今をんまうで、此うたをよむべしどのたまひけれを病人
よるまびいそぎ参りけるが願しも五月中の二日なれを貴殿群参のその中よあるひと現世安穩
後生極樂といのるもあり又南無薬師留理光よらいかれを助け玉へまれをそくひ玉へなごも
口々あの、しれば物さわがしくて必定のあらすしをらくて内院み入て人しづまるをまらける
がやうく深更おあよべをみな人下向して燈明の法師と病る人とをかり成けれと件のうたを
出しつゝしんでとまわけけり

南無やくし諸病悉除の願なれを

身よりはとけの名こそおしけれ

とくみもとてぬお内院よりけだかきは聲よえて

いららめやたり一時のものぞのま

おのよみのかさとよおぬきおけ

と聞へけり有がたき佛勅やとしをらく禮拜してたち上り見れを身のかさとおちてあどもあし
病る人骨すいに通りにて尊く思ひすぐも發心して諸國修行に出けるとのや

一休兼道くるひれ事

○和尚と兼道すきよてましくて見のつら死への艶書こ、かしおあ有といへりされをほ心の動
き玉とさる事は駿河の府中よ小玉弁之助とて鄙よ、げなき美童ありけるよ和尚ふのく口説玉
へどもしたがとざりけれを狂歌をおくり玉ひける

花と根に鳥とふるそよかへれども

人とおかたにかへることぞし

とをかりよて小弁どのまある都がたのづくようを書てつうとされけれを狂歌のまよるよや恥
けんしみぐいと返事や上てすあそち其夜まわりてほのどみに隨ひやさんとや上げれば和尚
うあづよくこと來りたり今朝までとよお思ひしが今ともとや用事もあまどて歸し玉ひけ
るどかや

傾城おは引導の事

○赤坂の宿のいづれといへる名高き遊女ありけるがしむらくの病ひひて身まかりけりしたし死
ものどを集りてやけるこそれ女之五障三従の罪ふかきおまして流色の身なれを大かたよてと
かなふまじいさや一休和尚を頼みたてまつりて吊らんとは旅宿へ参りかく罪ふかき女あて
いほあさけよ引導あしくださきいといありのたくまらひえめとひたすらねがひけれを一休
やすき事とてとくよかるぐしく其家にいたり引導逆しける

僧と衣を賣り女と紅をうる柳とみどり花とくれなる

喝どのたまむけれを棺のうちより光明かくやくと見へしが剩さへ其夜お日おろしたしくあし
たる者どもの夢お成佛とげたるよしを告げるとなり又同所に煎茶を往來の旅客にうりて世
のいとなみとせ男ありしが病をなえて頓死あしたるを近きあたりの者どもより集り水を
をそりぎ氣つけなど香せけれと更に其甲斐あかりしは折ふし一休は通りありけるを幸
ひの事とて其くしや上引導を願ひけれを

一ふく一せん二期の間末期の一句雲容の話

喝ど引導ありけるが是も往生とどげたりとふしぎにわたりの者の夢お見ぬけると

大食のは咄しの事

○或どき殊外大ふうをいふ男有けるが一休和尚のは相伴の非時を給りけるが和尚の仰けるとさ
ても其方くめづらしき大食かあどのたまむけを心の男いや是とたぶるとやはとにてえさく
い某が若き友たちとい合かけろくいたしたるとき餅米一斗つかせ我等一人して食すきどもい
かた食たらざりけれをあたりよ粟もちした、か有けるゆゑををも残らず喰尽したるよあま
りお腹ふ之れたるよより河邊へ走り行大なる舟なるを見るより其舟を横にもちて川水をせ死
とめやたりと首ふりてかたたけをを一休聞しめしさてもおびたいき大食のなそれほどの大
食とめづらしく去あがら愚僧がぞんぞたる山伏ありしはこれ大食人よてかけ録して餅米二
斗をつかせてをを一人して残らずくらひ余りよ腹ふくれけるよや廣き松原へとしり出て三
ろへへむりの松の木を捻折てこしをかけ休みける所へ小さき蛇の大なる蛙をのみくるしげ
に見ぬしが出きたりかたはらの見なれざる艸を喰けるみぢみくど腹へりたり山伏これを見
てさてよ死事を見付たる物のなとくだんの草を取て喰ける運のつきたるおや此くさ人の消
る草よて山伏は忽死ぬて二斗の餅とよんさんすいかけはら目金剛杖を餅もたれたるとの
たり玉へを彼男顔色をかへて恥入早々歸りて其のち二たびまゐらざりけるとかや惣じて狂
る空言といとぶるそのこの男の大ふうをいましめ玉ふ處と

化物は退治れ事

○北國方へは雲水ありしときある古き宮に大なる石燈籠のありけるがいつくともあき毎をん燈明をばしけるが其燈籠のかたこらを大の法師毎夜ぐるりく廻りけるを人皆あれを見て恐れすといふものなくされども又誰あつて見とけんといふものあかりけり一休これを聞めし拙僧今とひまれを退治すべしとのたまふに所のまのとも大ふよろよび日の暮るゝを待かねくたんの所へ行て見るゝ其夜をたがわす燈籠をめぐるとかさ車をまとすのよく皆人やけるいさてそ一休房がたいま有べき由のたまひしかども中々そのしるしもなき事と、りく評判なと所へ又法師一人あらされて其夜と二人はせめぐるほどお皆人いよく恐れをなえて飯りしが翌日あくるを待て一休の宿所へまゐるゝ房の門口より相違して昨夜と化をの又一人ふへて中々鎮るけしと見ゆやさすといふに一休開玉ひ其一人と拙僧にて夜もすがら追のけ廻りつゝるお化ものは踏倒したるほどにもはや今夜ぐりは出ま下たど化もの誓言をたてけるによまのるし遣したり心易のれ今夜ぐり出る事あらじと示玉ふとたしてそれより何の怪しみもなかりけるとかやふしきも世にあるとなり

豆の秀句の事

○一休和尚といたつての輕口にてましませをある地頭の奥方よりゆ越しあつて何とぞは咄し承り度よし和尚聞しめし何より安きは事とて早速まゐり玉へを上臈たち居あらびて聞玉ふよ和尚まづ佛説を切口上おては務がたりゆりけれを上らう衆感ふ堪かねは教化ればとあし有かたくい得せも余りみじくくて本意なしねのよくとあがくと退屈する迄は物がたりわれのしとやされけれを一休ともうも望にまかすべた幸ひとあゝあそいへ拙僧さる方へ夜咄しお参りけるにいい豆を菓子に出しけるのたたらりあ豆秀句となしたべんといふ皆尤とてまめの子のまめなやうななど口々おやす中に賢ふくをちと見ゆる人出てやさるゝにと奥さまのくしの参りとしてした、かつのこて喰ふものあり人々聞てあれといかお豆は秀句おれくさまのくし野参りどと心得すいかおくどせむれをさてはぞんじあさあや井の内の蛙大海を知らぬためしありいづれもはぞんぞのどふい當春これのし頼たる人の奥さまよ玄野へ参り玉ふおは出してまゐりしよ道すがら名所舊跡うちなごめさはの川邊井出れ里玉水あどやうの名所つふさお見物してはほさく吉野おを成ぬを山とさながら雪かど見まがふをかりあり神社おつかく残らすめぐりおがと夫より高死所にのぼりて四方をうちながめ玉ふ所おかに嵐ふさ來て奥さまのぬり笠を谷底へ吹れとしける其ときそれがし深き淵にれどむかどく薄き氷をふ

心地して殿をつとめてつむ取て歸りぬされども笠と少しとげたるをおくさまはらんとて
 さてもうたての事などのたまひしそれより立田法隆寺奈良初瀬寺などいふ名所三ツ山だる
 「ままたへまあとやうの舊跡は見物あつては上京ありしどころへは一門のは女中の見まひ被
 成けるおさまもじんじやうなるぬり笠をゆめていつれも越しありけりそまよつて思し召出
 さを彼とげたるをぬらせよと仰ありけるほど塗師屋へあつらゆきを銀三錢目にてぬらんと
 やす興さま聞し召てそれは六のまき事かなさらむ手ぬりおせごどてうるし屋へ鳥目二疋をも
 ちてうるしを求めけるにむくろじ程ありけるを惣トて興さまと物事おびたいしくのたまふも
 多是と少きとのち豆つぶほどありとのたまひけるさてこそ豆の秀句にと三國一のことかどじ
 まんらしくやすきたりとかたり玉へは上臈衆退屈して色わるく成おけり

國司へ下帯を遣えさる事

○或は大名の家中の片岡彌太夫といふ浪人が宅に一休ましくけるを此所の地頭さつつけて使
 者をもつて申上げるは長の旅にほつられさるべく見ぐるしくいへども私宅へをば入來あり
 てほうさを晴し玉へかしとやつかとしければ和尙とくまをばまねき添けなしとて使者といも
 地頭の宅へ参り玉へは地頭を本意よや思ひけんさまぐはちさう申上げてさて何にてもは手

跡をくだされ度と乞けきを一休やすし事なり旅宿へ歸りてしたしめ進すべしと釣束し程なく
 彌太夫が方へ歸り玉ふ引ついで使者さたり先ほどは契約したるは手跡此のへ下さるへ
 くだといひきたれを和尙をあまさせとしうや覺しけん彌太夫の書さしたる文のありまを使者に
 わたし玉ふ使者よろまび持かへりて主人に渡しける則ひらさみれを見知たる彌太夫が手跡な
 り是はふしぎ成とかな使の誤りあてよそあるらめと使の者を尋ぬれを直々は手より玉とり
 しといふよさてと餘とあいなさきてやたる故は取ちがひありしものみやと又も使をもつて最前
 下されしと彌太夫が手跡と見ゆやいねがとくとは自身よか、せ玉ふをこそそのぞみおといへど
 やつかとしければ和尙うさづき左ほどに深くは望ならをいかでおしみ申すべきとまた、かに包
 たる袋をこそわたされける使者もち歸りて主人あわたせをやがて袋をひらき見きをさもよぶ
 れたる古き下帯にてぞありけるが地頭どのも手をうちて笑ひける其のち又もは入の折ふ玄柳
 とばのりれ大文字あて一字のさて送り玉ひぬ又ふるさ屏風お何どもわたちの知きぬ繪ありけ
 り亭主よとひ玉へをばまじり古くありひて見分申さず私親ともがやつるよと馬どか牛どりや
 らんよて座はよしやするれを和尙牛からを角めるべし角なけれを馬あるべきとどのたまふ
 亭主やされけるにとは筆の次手に此給にも讀をめをとし下されよとやされけれを易きこととの

たまひて大文字よて馬トやげなぞを遊しける其繪今にありていとせめて度は藏よおさまりて
寶物の其一ツとぞ戒たるぞと

長咄お退屈せまもの事

○さて和尚さま先夜のほとさしとおもまろくひへどもあまり長きほとなしめゑたいくつ仕ゆ何
とぞ今夕はまぢか死ありのたきとわれくどもよてせわのり安さは咄志をほきのせ下された
しと一座のそのどもは願上けれを一休いかよせよさとなしあり皆おさ、やれや日本はおろ
か、ら天竺までもこの上もあひありがたきそのと飯と汁トやげな何と皆わかつたのくく
と仰られた

大俗問答の事

○ある時出入の下男まゝろに思ひけるふは此寺の一休さまを今までの知識者として皆々たづねて
見へるが問答とやらんを聞に何でもあひ事いふてほじぎして飯らるゝ我等も和尚どもんどう
して見んとふと思ひ付て和尚さまおほたづねます男とすもの生れ出るより珍寶とすもの
をとつて出ますがそれと成人して落す人の是いゝんとすけれをいまだ言葉もひらぬに金玉と
いへどもくろさがとし

大百姓のゆつたげあが其となりふ丁度そあたの様を貧家に種腹ひとつめて十八人の子をも
つて今其方のやさるゝ通り親ふたりハ正月元日より大晦日まで食の足としらす隣の大百姓の
事をうらやみ居けるがある時夏炎天に大勢をわつめ麥をふみかこいのうちには元と門外まで
おも干ひろげたるゝ貧者の其麥を見のに付ても此干たる麥むしろ十八まい丈あるあらば子供
み一枚づゝ當わかちを我等夫婦が此苦しきも有まじ死と思ふ事をもしらす子供等のあしあ
まのせてあそび歩行て目のとく所に一人も居ぬとよと思ふ折からにわか空の曇り大
雷ありとためき大夕だちふりきたり大道 忽 大河の如くありて件の干たる麥のく取入へ
死間もあく残らすあがしたるが隣の夫婦と門口へ出てぬいせんと思ふ所へあちらこちらと
り走り販りけるもゑ頭のかずを員見れを一人を不足なく剩格別身をもぬらさうりける依て
昔より子とをい寶じやといふ程に出のゝやれく其長者といへると大和國十市郡天は香具山
の東北おとよし高き岡山を長者やしきといひまた其わさゝ白木塚とも笠塚ともいへる塚あま
よれと其時の長者主人と元と家内出入とのまで一飯とお其しを捨てふたゝび用ひさきを
其捨たる箸しせんと山とありとて箸つかといひて今おあり又佛説の中よも鬼子母神といへ
ると三千人の子を持玉ふ其うち一人を隠され夜叉と成玉ふといへる事もありとて歌をみて玉

兩眼のあざらのあるを持あがら女よめへた目あしとぞある

女房は弁才天どうつくしい美人といふも皮のとなり

子と賢きりとの事

○一休のは寺へ常々心易く参りける百姓の元より家貧くさうへよ子多くもちて其日を過去がたき程のものふて有けるが和尙れをどへ参りさてく私どもといふ成因果よては哉はぞんどの如く子どもと追々出来まして當年二才に成を下として都合十二人まで出来まし其中にとぞま子もおざります私夫婦のものは日に三度の食さへ腹に足はど下された事とてもなと是がまとの子の地獄へおちたどすのかとぞんじ并れを夫あらばどれ子が憎どすものもござりませぬ又かやうの貧家へ生れくる子供も不仕合かとおをへといよく不便にもぞんまとは是も前生のひくひよては哉は聞せ下されよと言けれを和尙うちうあづき尤々さりながら下の子といまだ二ツとかいやれをまだくいくたり生まうやらしれぬならす夫婦のものゝ氣をつさぬやうふして有とさふとひとつ處へより寐酒でものんで氣をこらし仕込でと出かしくするがよいと仰けれをびつくりして和尙さま此上出来ましたら夫婦の者へ何と成ませうとすけれをされを夫お付てとあしむある昔奈良の都の頃白木の長者とて日本よたれしらぬものゝなき

わりけり

親となと子と成くるも今ならず二世も三世も尽ぬ契を○のすをなき子を賣人もありと聞く
親でとなふて鬼の再来○親と過去わの身へ現世子と未來後生大事と子をを育てよ

八ッ橋よて狂歌の事

○参河の國八ッ橋と名おしおふ名所おてそのかみ業平もかさつたの五文字を句の上よおきて歌よまれけるどのや一休おもいかざる名所おやは覽なされたくや思召けんところの里人におんあいさせてほらんするに八橋とあきてかさつたをなくとこるせさまで田をうねてけれをいつれをやつとしとを見をわかぬていなりけれを

おとあさく三河にかけし八としも

田をかりありてかさつ葉とあし

どあそばされけるどかや

瓢箪の曲遊の事

○一休和尙の手まへ拂底のトふんにて有けん一條もどりをしに辻に高札を立られける

一此度日本老和尙一休三明六通を得て瓢箪をひつくり返と望れ方々見ぶつ可有

者也 今月今日よりとじめす

と遊心をきて紫野芝居をかまへ玉ひける事とて言とやしければ京わらんべ老若男女貴賤貧福をわらす足を空よなして群集をなし芝居をつみぬれをさらむ時分りよきとて一休は用意あり衣のまへに大ひなる瓢箪をふらりくと付たまひ両手よむちを帯て西より東ひんがしより北北より南と飛びぐりとねかへりあんど幾たびをあしたまひ大音をわけたんむやうくととて二十へんをのりまはりねまどりなごし玉ひて其後樂屋へとしりいり自身に大鼓をうち玉ひ是のとりくとて残らず追出したまふ見物のものども是といふ成事とて狂のるもあつあるひは今にとぞめぬ和尙のおどけ哉としをらくと口を得ふさのぬものをも多かりけるや

浪人は引立ありし事

○しをらく甲斐の國おほどうらうのうちみ一人の浪人は出入りけるが一休さまと生佛よてましまとよし國中みなくや事にいへを何卒我がみの不自由なるをたのみ奉て身上にあり付いや偏にたすけ玉へとてひたすら願ひけきば和尙もふびんに思し召さき一門にてもなきやととせ玉へを某の一門歴々まのりあれども尾羽うちらしぬれを恥のとして参り得ず且と

路銀のよすがもなく不自由めて迷惑す身おていあこれ和尚さまればかけにて身躰に有つさや度よしひたすら願ひけきと和尙うちうなづきのたまひけるは其方藝能となふを得たるや浪人またへて万事不調法よいとや上るいやくればさくの果とあれば禮樂射は書数のうち一々ゆび折立てとひ玉へを一つとして存せぬよしや上けれを扱と浪入したるを道理とにかしくししばらく思案し玉ひけるに彼浪人やはと外にぞん玄たる事なくいへどを故わつて敦盛の舞一番ぞんじていといふお一休さこしめして夫社日本一の事よどのたまひしみぐと内談遊して不便よりするものをのたらひ其外鼓打などをよびあつめ天晴云合せあり芝居にまぐを打こ、かして高札をたて玉ひける

一此度上方より幸若罷下勸進仕勸進元之日本老和尚一休

と遊されしかを侍といふよ及ばず町人百姓五里七里をいとと貴賤群集してさや廣死芝居よ小家の破るも何ぞお見ぬたる所へかの浪人しやうぞくつけ氣だかく身つとろひして舞臺へ出てあつもりを一番舞すまして樂屋へ入とひとしく一人の男出まよとみ歴々さまは入は見物のだん有がたきなきといんぎんに一禮をのべさて此つぎにと何をかまとせやさんほこのみ次第とやけれも多勢のけんぶつ口々に大職之んよいや高たちよ清しげよなどと思ひくと言は



やしけるところへ兼ていひ合せありけん五七人のわぶき者どもこ、かしよよりおどり出てい
 や外の舞と見たくさしゆつもりを舞せよといふふれたる男同じ舞とほたいえつにいとんとい
 へむらのわぶれもの共いや我々のすきじや敦盛を舞さずんば芝居を踏くだかんいやつかみひ
 しがんさどいふゆとよ又敦盛をまてまけるが舞とて、又前の男出て口上をふきければ又溢
 れもの出ていやあつせりといふまゝにつけて四五番まてせける其後とまづ今日とはいとま
 こひとて追出し木戸口よて明日は取かへはらんに入る、評判とふれけきむ前の日とらも人と
 多く入ぬは定のあつもり一をん舞とま次とといへと又前日のとくかねて仕ぐみたる事あれば
 幾へんよてもあつもりよと七日までこそ仕たりける彼浪人たよとを得て一廉の身上とありけ
 るとかや所の地頭の耳あも入ぬれ共一休の事なれとてほしかりもあかりけるとこ
 文銭れば咄しの事

○おる人間ていとく和尙さま通寶の中に裏あ文の字を書たる銭のひといか成子細よてい哉とた
 づねければさればの事とひかして亂國多くして親をうしなひ子をたづね我が身の住家も定の
 ちらずして兼食をわと中々数枚衣をのさね着といふとあらなりしと聞きお中むうしのころ
 よりありがたき聖君のは代とありは治世ながく百姓町人といふよ及むす下賤の民までが日

は増えねぶりよ長じ亂國とやらと軍書でとむをのり子ともの耳に之聞のみふて衣食住の三ツ
 をほまいます、お美を尽し善尽と世代がありしとき、しつ其時は上様のは目にはまると万民のう
 らひ遠ららざる基とあるふしとは意をくるしめ玉ひし折から銭を儲まし廣く日本中へ出し玉
 ふ印は文の字を書せ玉ふそれといらにといふに銭の穴の口之口の上ふ文といふ字の
 客といふ字なりこの結構の寶をおしめくとほしめしありといふ事をこれもさけりや



仰られき

濁り酒の問答

○一休和尙山居しておひくますときしたくは出入やす仁寒されは見舞せし折からおどり酒
 をまのりの玉ふところへ参り合てよめる

山居して心すまを聞きぬるに濁り酒をといかで飲らん

其とき和尙どうのいす

山居してのむ入るものを濁りゆけとて浮世はそむ身でもな

と遊をしけるどいや

山伏と問答の事

○一休關東へおもひかせ玉ふとき供人などほつれある事をいとひ玉ひて普化僧のすがたとあり尺八を吹て通らせ玉ふを道にて和尙を見しりたる山伏よのひ玉ひしに山伏しらぬ躰よとひをかけよるふといかお普化僧どの何方へ行玉ふといふ和尙こたへて仰けるおの風おまらせと仰けきを山伏いおけると風なきときいのかん和尙たへて仰けるに吹て行とありけきを山伏もがをうられて口をどぢわとを見ずして過けるどのや

壁よ寄する戀といふ題よて詩歌を詠玄玉ふ事

○一休和尙のかる口あるは事をよくしりたる人は作意を聞んどは庵へ参り壁よ寄する戀といふ題よて歌一首遊しゆへと所望おしけれを取わへず

君まつちよねをやひとりぬるをかう

戀にしたぢのなとたちにつけり

とあそばしける又烟の戀といふ題よて詩を一首よまひけれを

再々 輕烟 惹恨 長六宮 宴罷 月昏 黄

羊車 不至 芙蓉殿 知有 佳人一漫 炷香

不動の古佛の事

○或人不動明王の古佛を秘藏して安置し居けるの常々其家へ一休よる安く行玉ふあるとき彼

不動をば覽じてやがて一詩を賦し給ひける

全躰 眞黒 稱明 王一生 付片 輪目 口張

一生 不犯 無念 者一 去何 處固 護廣 堂

かく七言絶句を作り給ひ汝いかにも不動を信するならん眞の尊像を繪がきてあたふへしとて筆をとり給ひてさらく〜と大筆よて水中よ岩ニツ三ツを繪がき給ひて大字にて不動尊とあそをしのく岩のとこお心をうぶのすまじきと示し給へり

生前死後を示し給ふ事

○ある人一休和尙よ生死のときえいの心得てしあるへ死やと問ふ和尙のいよく忠孝仁義に過たると無いと仰ければいよも有がたく心得やい死ての後いのかん火葬のちの芽萱草とやならん汝何とて死後をはるぞや自得せよ生あるものと必死あり平生臨終のときと思とい臨終のときも平生あり目前に死苦いたるとも驚くに足らずして生死の念をかけずんを微塵も屈する事なりとて一絶を賦てあたへ玉ふ

不 辞 因 果 一 受 三 塵 一 止 水 對 觀 垂 柳 邊

明鏡本分月下客 花晨興到樂二皇天 三百十〇

また問ふ如何か是佛一休答て曰

河伯來りて水を求む

河伯と水の神なり世界は水は我手のものをさし置て却て外に水を求むるがとく汝が本分の佛性を願て自知せよ

佛よとこゝろもあらず身もならず

あらぬそのことならぬなりけり

一絶を賦して云

無始無終我一心 不成佛性本來心
本來成佛安語 衆生本來迷道心

一やかといふいたづらものが世に出て

多くの人を迷とするのな

此歌の意之前篇にくらべてく愛の零す

蜷川新右衛門戯問答

○あるとき蜷川つれづれなる折から和尙さまの許へまゐりたてふれたる事を尋ねて

これうたのころと一ら玄恐らくと

釋迦も達磨も定家家隆も

一休返歌ふ

釋迦達磨定家家隆をまらぬ歌

蜷川

おもかげのかとらぬときといかばかり

くその役もえたぬありけり

一休

おもかげのこのとらをかこれ年をよれ

無病そく才死なむとつどり

同

世れ中あさかせたちぬ花す、た

まねかばもかん野へも山へを

○は一代のうちに狂詩の多かりしを前集よ出しぬとせ今またそれたるを出す余と狂雲集

於一谷

壽永三年三月天

源平合戰無申斗

題茶釜

有口不言全体圓

井呑大海江河水

題黃鶯

鳥亦說經似度他

林間花若諸菩薩

又題一谷

打落平家無數兵

敦盛熊谷進遲速

落髮之時

東山々下玉毛頭

九郎冠者乘兵船
海底死人幾万千

不離色相一絶諸緣
吐出趙勃一味禪

樹頭樹底妙音多
中有黃鶯小釋迦

九郎冠者大高名
一朝懸向上時聲

今日出家作比丘
平生所望一時休

夜來抱汝臥空床
懷鼻揮中日月長

判官召道射成功
七花八裂扇真中

宇治川先陣給之
梶原源太一鞭遲

元來見來更無骨
瘦僧一捫沒生涯

題

我此貪裸八寸強

一生不觸美人手

題

與一源平第一弓

塞目所念鞍馬上

題

類朝大將秘藏馬

生食前非磨墨後

題

垢耶塵耶是何物

雖爲人喰十分肥

歲且

移得天台真羅漢

題

我此貪裸八寸強

一生不觸美人手

與一源平第一弓

塞目所念鞍馬上

類朝大將秘藏馬

生食前非磨墨後

垢耶塵耶是何物

雖爲人喰十分肥

有銀有酒有金銀

當寺他山若僧達

戀

日夜思君長不忘

夢中携手欲相語

同

花咲花而老易花

花時花亦可情重

同

生天成佛閣思君

有力秋風不應拂

飯在中央盛曲盈

感三酒性靈水

今年初成大德人

未申案內往來頻

夜深戀慕臥空床

被駭曉鐘又斷腸

花顏花盛夢中花

花落花過誰問花

同

燈下吟詩瘦十分

胸關鎖斷楚山雲

餒頭無味鉄崑崙

水出推流地獄門

布袋贊 人言是座禪 工夫無一字

布袋依袋眠

大食腹便々

漁父

學道參禪失本心

湘江暮雨楚雲月

辭世

扶桑國裏沒禪師

今日窮途無限淚

同

東海兒孫誰正師

狂雲身上自屎臭

同

東海兒孫更有誰

他時吾通竟何之

正邪不辨盡偏知

飽簡封書小飽詩

不管人天大衆憎

悟の歌

- とちす葉のみおりよそまぬ露の身とたい其まの真如實相
- 佛どてはらふもどむるまゝろこそまよひの中のまよひまよむありける
- ちれをさき咲を又ちる春との花のすがたに如來常住
- ぬらまづる袖のなみだのかとくまもなき面かげれ月ぞ立とふ
- おのづから身といたづらみ成おけりこくうを常のすみ家と思へを
- かりの世おわたる露の身をもちて千とせをいとふ人のほのあさ
- 世のうさあへてすみぬる柴の戸お問ひはなる人をうらめし
- 妙きり一法はちすの花の身を幾世ふるとも色のかいらす
- 其まよふまよふまよふの心おそねがとすとてはどけなるべし
- 露どまへまがろしと露お稻づまのかげの如くお身と思ふべし
- おげくまよ誠の道とそまよふたつともまよふ又三つもまよふ
- らくく〜と心にてまよ彼岸にたたるをやすき法のふな人

- 生死のまどとりしらぬ坊さまと犬の衣をきたるなるべし
- 奥山にむすむすとも柴の庵まゝららまて世といとふべし
- 國いづく里といかよど人といと本来無爲の物とこたへよ
- 焼すて、灰よなりなむ何もれか残りて苦をば受んとぞ思ふ
- 忘執の雲をくらさで終る身のあり果を見よ地おく成らん
- けぶいたつ野邊のわこれをつまでかゝ所に見おして身と残らなん
- ひい〜に行末とほく成にけりいつをのさりのいのちなるらん
- 關よりよどが心をやか〜ぬらんすぐなる道を行かぬる身と
- すみのぼる心の月の蔭とれてくまあさみの本の境界
- とをかきくもあすの命をたのむ哉さのふと過し心ならずや
- さとり得て心のやみの晴ぬまはじひもなさけも有わけの月
- 三日月のみつをむらけて跡もあしとよかくよまたあり明の月
- とるとよ咲るさくらを見るとおなほさかなしと身おそつらけれ
- 待得てもはせとなのりし郭公ともをさそひていつち行らん

○年々よしくれのそむるそみぢ葉を四方のうつらふためまどもしれ

○月は家あゝるの主トを見る時となはりの世のすまぬありけり

○こゝろを墨の衣に染ちして身をばうき世の道にまかせて

○寺を建堂をたてたるごとくとりたい常々のじひやましなん

○しむしかよひきの一筋かよふほど野邊のかたねもよ所を見ゆけり

○色相と其どきくみらるとも不生不滅のふゝろかはらじ

○見ることに皆そのまゝのすがた哉柳とみどり花とくまなる

○前篇より一休和尚は母君へ水のいみ目あし卿あんどゆふかき書法師を書て進せら

れしのうちまた昔よりの祖師知識方の化わりま言の葉をひさてのな文とあし念

願に示し玉ひし文

往昔今に至るまでうき身の有さま夢の如くにさへ思ひさきいへを何事もほ心のとまる事はさ

らましくい愛を佛はとこんねん有て法華經の文も觀彼久遠猶如今日とほのべし此文の意との

の久し死とをさ事を見玉ふよ同じく今日のとく見玉ふとのほ事よては天地ひらは下まら

しより已來かゝるとあして万の事をさとりたまふとのほ事していゝのれをさのみ深くは不審

いなるまぢくは佛法とやと生者死苦をいましめ玉ふのみさらよ心とをいめてを其かひさる

と見まひらせしを先禪家おもちひすいのやうし事證據あくいへを如何とお不ぞ召いやと存

ひのしの事を大がた引入は都に夢想國師とて日本よかくれな死は僧のましくける其頃と

尊氏將軍のほ代なりのの夢想てくしさとりのほ歌お

夢の世おゆめのとくに生れ來て

つゆと死へおん身こそやすけれ

夫人間のありさま万事といまるとあしをよの生のとまめをしらされを死のおそいを見ま

へすやみくぐらうくとして苦の海よしづむさう佛を哀とお不しめして色々のほ方べ

んにて衆生をすくひ玉ふされども人間のまゝる不同よまて惡道へあのみをそよみ善方へは心

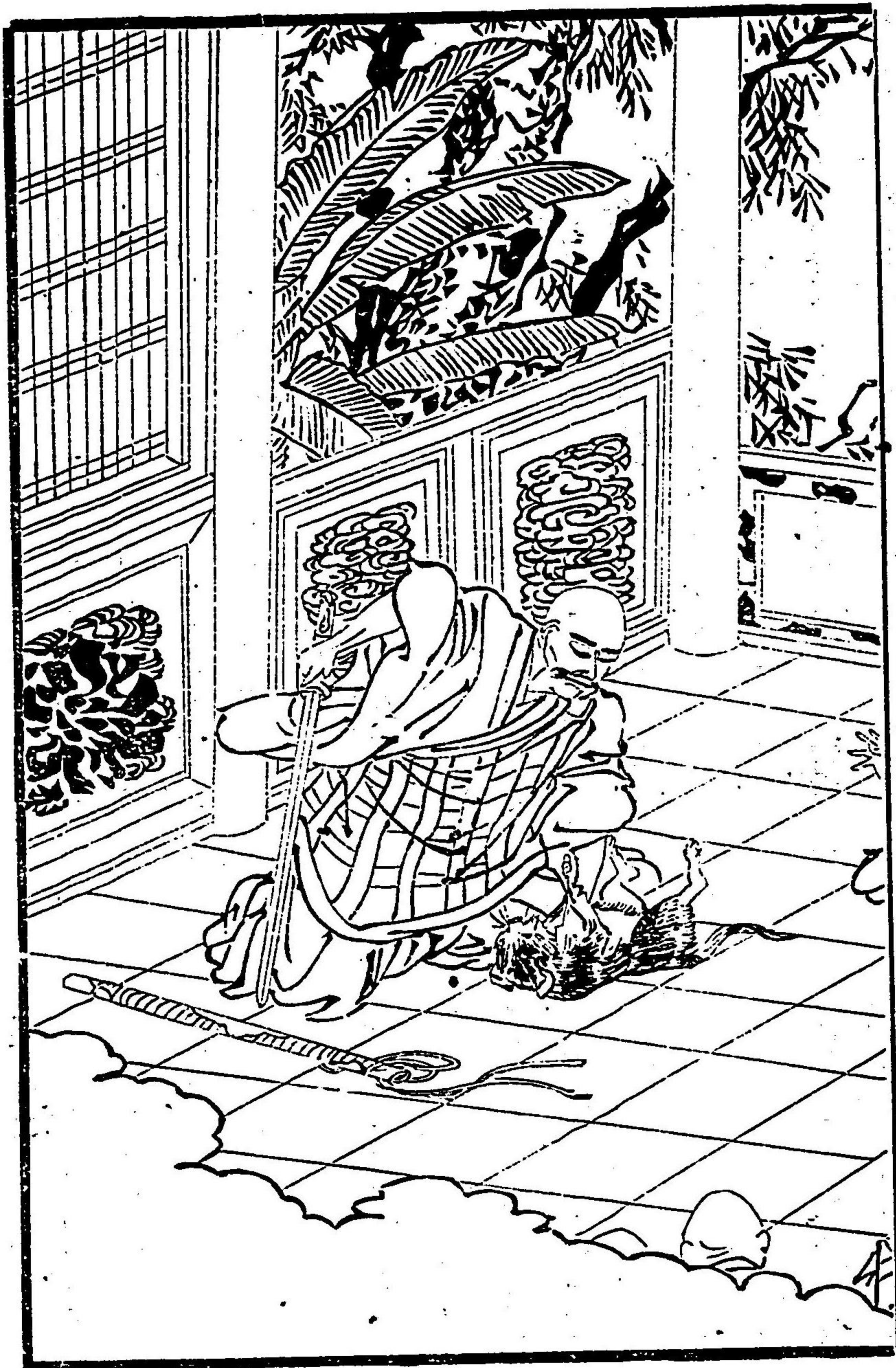
すゝみがたくいたづらよ光陰をわくりあされみの業果たへすたましく教ふたがふといへども

名利の善をなすとむかりなり名利とやと其身れ名をわけ人よはめられんと思ふ心をたねとし

て堂塔を建立しと死の富貴おおれり斯のとくれ人を佛とふかく死らとせ玉ふまことれ道と

万事法度をそむかす世にしたおひてかたく法を守る人を佛道に成就の人とやありは年もとや

くれ近く成らせ王へを何のほ望ひさいとんや殊さらちおくの話をもしろしめされいうへと行



く水のおどくよほ心をもたせ玉ひては胸のうち何事ほさかへへ心世尊は一跡のほ身ほ
さあるべくはまをほとけ三部經ふ已心の彌陀唯心の淨土とのへ玉ふ此文字の心はおのれ
こころ彌陀たいこころの淨土とや一のれを十萬億土はほねがひあるまどくは
佛とさふをいはまの苦むしろ

たゝ慈悲心あしくをのぞきし

此うたのおどくにほまゆよういへを何事も佛心で見まむらせすべくは古しへ舟田のほとふさ
やうふて宗建をとぢめまぬらせ人々すささせ玉ひは事夢とこおぼしめされすはややまでを
くくたさとかやうあけなげよほ入ひてはたくしをなむらへ佛法のほ事どもや上まぬらせ
ほ事と他生の縁ふかくとどんじい因果經お自以唯ならんと佛をほれべはまた母あてはものと
七十六日て去年相とてられは心昌とやせし辭世の歌

世々ごどに見ゆつかくれつすむ月の

かたらぬ色をたれかしらまじ

此歌をくちすさみて其のちとそれさまへ参りては菩提の心をすゝめすはへとくりのへしすさ
れはつるかのほめいをそむさかなくとんまひてたびく参りはつる母よてはものゝ事おもひ

出參らせはへを一しほそなたへ参りたく社へえやそれさまのほ覺悟を大おんら之の道に
ほ心つきはへをめで度満足いたしほほなぐさみなどにほのんきんをしめるべくはほ心つく
してと夢をほ沙汰ほまじくは大般若の文お一切不行を佛の行とすとほ座は愛をもつて昔さる
知識のすたに

はら樂や虚空を家と住あして

こころまうくるそらさへもさし

出るとを入とを月をおもとねを

心あゝる山の端もなし

こきと生死にとりわぬところの歌あてはよくくほくふうあるべくは又弘法大師のほ辭世
に

今こゝや後世のつとめもせざりけり

あらんの二字のあるよまのせて

らつせどつとどの入りかやうに日まわさひやうやかかれはまた慈鎮和尚のうたよ
かりの世にまた旅あしてくさまぐら

ゆめの世もまたゆめを見るかき

引よせてひすべを草の庵にて

とくれをそとの野とちちりけり

是は色相のうへをかるく思しめしゆへとの心みていつれ日いつのときも大事來り參らせし
ともは心のうちに何事も思召ゆまなく病難もしいたくせめ來ゆともそのくるしみにまかせ
て相果ゆへと大惠の黄藥禪師の傳心の法要とりに書おかれ日本にて聖徳太子病あんと
まは歌遊をされし

うた雲といくへもの、れ空よ消

月とくまなきひより成けり

此歌のこゝろと何事をとりあひひこで無念無想の所をもちひゆへとの事にて候又ゆらの開
山のうたに

何事も夢まぼろしとさとり來て

うつゝな世のすまゐなりけり

此歌のよゝろいかななる大王さきに其外上下の人々かあしむ給ふと死の道にて候まゝをこへ

はのくを候へむすなとち安ぐらの浄土九品のれんげおまことこれて大安樂のは身とあらせ玉ふ
べし大世尊のは説法よも女人成佛ののたき事をかくと給ふかやらの事を聞おしめしては道
心すてさせ給ふまじく候其まどとりを荒々やわけ候男子お生をうけや候てのこらす成佛すべ
きにあらすとに龍女の八才あて三國に名を残しや候は經にもほめ給ふ然を女人おそきほも
たのもいさほ事おて候へを成佛とてべつにたつときひかりもとち奇特をも見せや事とある
まどく候はさどりのは心中よまれどは不審候とぬと思召候事座おく候を大のさどりと事
よて候佛は入滅のよち祖師先徳のさたし給ふは法よを見理受用のふたつおては入は三ぞくを
もは太儀お思しめしまじく候五戒百のい五百かいをたてられ候事もたゞ一身のさたよては入
候は女房衆れはさどりの有しと嵯峨天皇のはささき檀林皇后あり其外人の数をしらす美濃のく
まゝと興性寺に千代能とや女さどりと候其歌よ
とみかくみたくみし桶の底ぬけて

水たまらねば月をやきらす

かやらの事を聞いめて今日より禪宗れさんごくよは心をつくし給ふべし愚僧は手を引やす
べしまづくくさぐさぐのほ心をたよせ給ひ後世をたすのり候とんどはかくお候へとどめ

ずもの何者ぞや又かやうに不審をうけずもの何ものぞやと目を見えず一てさましくなり
 ゆく多よ六道りんるのたねと成とを佛されを二せくと説給ふ一よけんこん二よんかり願立る
 と三ふぐちの心この三つをたぢいへといふしへ今にいたるまで一めとなりこれをしらざれを
 愛まうの心ふかき故み人をねたみとしりわれをうらみこんトてたがらよ苦しみのなみだを流
 し袖をしぼるない是みき一心のわざあり久し之遠き事を観念物をわすれざるを一心なり四百
 四病をうけ大苦をうくるを一心之雪霜のさむき事をいとひ大温を苦となすも心なりされを此
 心一ツを取どめられたければ六道のおうたへす生に生をのさね死を死をつたうき沈むのみあり
 此心といふものといかにとこんトヤに影のたちもあはれものありかたなき故お消うせずか
 きを生もなく死もあしよを佛とを金剛の正体とものへ給ふなり無相にして有たるが故且古
 來より行といまる事なし住所さらよあま色相の生滅あつづるふよつて無常と説死又と大死
 とのべて是を怒みかあまみて定離とすへのやうよ入は心よかたならん所をばらんせら
 れいへとや事よてい何ものか色相をさつて佛神とも鬼神とも成すべくいあり浄土と穢土の事
 こゝを以ては分別あるべく候は不審のこれや候とやまよひの雲千里萬里の外ふとらひ一つと
 しては心といまる事あるまなく候こゝを大正覺とすなりこゝにいたりて心經よも色即空空

即是色とよき給ふ一心の外ふべちのものあし本とり經にをさ一心之無始無終おして住所なし
 愛を開て天地草木は畢竟一て見る法とあさく候見ざる法とふかこやく生死のさづかをこ
 かれて大解脱のは身とならせ給ふへ
 は工夫にも古則話頭は不審となれ候よ一仰られ候尤も候むか一の僧たちの築め給ふあそら
 へをわらくのあめてはあぐさみよ一参らせ候
 本來の面目のーめしやう不思議不思議未生已前いづきの所より来る又といふなるが是本來の
 めんなくと斗もとひや候此言葉をうけとりて三十日五十日乃至一年二年くふうとどけて案ト
 ややうと我が身の生の所の佛もいづれの祖師もしられま一候佛祖ふしぎの所是みて候とや
 候へを此上にまよとていろく大事あるよま長老すされ候間また是を工夫一て候やうえ
 天地開闢よりこのかた知られまじきとじもようす愛めて長老尤のよしすされ候學者の智にお
 しぬふよつて其語をするあり大かた此分お候

えくじもじの話頭とていなるの是をさしいらい意といふこゝよて祖師はいとく庭前の栢樹
 子とまたふ心をさんせよとやにまかふして學者の曰祖師の再來庭前のはくまもしも同ま心よ
 ていたり天然の理にては前後しらぬ心よて候とてぢやく語に松と直く荆とまがれりとや又色

相分離してのちいかにとふ松直からず荆曲らずとや三度四度すのへしてこれを至極の道理とすす是を柳はみどり花はくれきひのまゝるなり此極意は口といふ根本無相ある處をしらんがためあり大かた此分は候

萬がうふりうといふ古則をろづよ友たらざる人まれば何人ぞやと問ふかくしや耳をそをたて、是を開き年月へてややうと我が一心の萬法の外みてり躰も色も香も味も候物にくみせぬものも候しかも天よおほひ地よ満りしかきは左右もなく脚下まなくとして有ける故に法界一心とくごんじて大國のうち居士名を獲とこれと目も見ぬ物の有所を見出してかくのとくす之地獄此とさやふれや候心は入い也

本有圓成の事はんらいの佛何の縁をもつてめいとふの衆生となりたるぞや學者くふうしてすやうと根本と無念無相の佛あるを衆生の色縁ひひかれてかやうに寒うん苦樂を得る身となり來て候爰に念をといめ此界にまんねなくを本身の佛性あるとて此と死種々無量とあしとまぐ言葉をつくし善根しやうと見るあり

たその話の事釋迦みろくとのれが奴かれたそまのさとりをうけて年月へて老僧の前へ出て座上お和尚無く眼せんに我あしとやて一味平等のところ何の差別あらんや然らば奴もあし我

をなし上下元來佛も衆生も一躰ならずや大かた此分の心にてい

いのなるかこそ地獄としめされて年月を経て工夫してやとやうと眼前まき地獄とや又とふ何事お地獄ぞ色相おれぢぢぢあり色相分離してのいかに眼光落地すまゝ見えす智慧およつて種々の語をうけ大利益無に浴びてあさましくい

ことんかけざるを死といかん學しやはいとく小魚大魚を吞又かけてのちいかん大魚小魚をのむ此心は舟の帆かゝりてあるときと大なる魚がらひささうを、のむといふのはのかゝらざるどきと小さな魚が大なるをのむといふころなり此ころと諸宗お少しも知らず禪家の大事なり有とやさんとての世おある事を吐く語をかくし又無ある事をやさんとてと世おある事を吐て心をおくして生死思推の處をむつかたくやさん爲なりは理座は直おやべくいなりりんざんの三よう三支とや事のいおやうの事はやつくしがたとい天地の間に三つもとむ三つくろしとや事何ぞや是をしのも三とや事ありと、くの心と父母と我とは三つの寶なり一つもあけては物ならずは三支とやとみあもとの無性とくろさのたちあり出生して万の事を行ひい爰に大秘密のとわりようの字これ則大事なり

大國のなんせん和尚此猫兒を切る事の大衆これへさるるなり趙劬爰も來つてさうおひを取

てかしらへあげ衣を身にめて、和尚のまへに出る和尚のときねまを切て後悔してうじう甚もつてめんが成る第一、色相に逆意をさるなり迷ひの衆生、色心とを切とを得ずたまへく切といへど、せんとされを放る、所かしの文珠のりけんともたふびつかずとや心にていりんさいの四かつとて人の死たる所よいたりてかつとこの心たしかに心得たる僧さまなりた、いとやうしもう僧とやと本ふんにおとしてまれを至極と古人は見理此所にあらずすでにりんさいと命根本不絶といへりしかれを當時の僧たち大なるあやまらなりととみちくにして衣をかへ人の眼をつぶして布施物をとりかのきの生々世々ののはをまねくあこれむべき第一あり

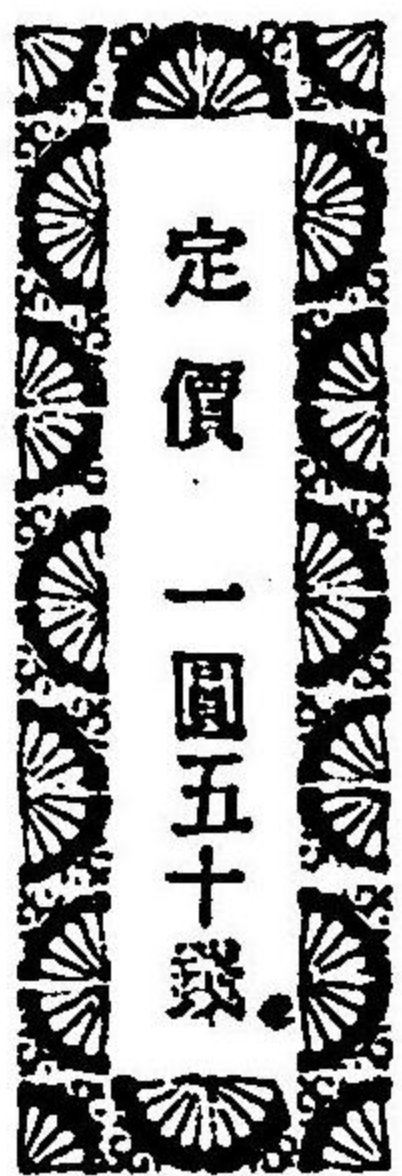
百丈やらの話の事大しおぎやうでいの人かへつて因果あるや又あしやとふ答ていよく因果に落すとあり此報よよりて五百生野狐の身は墮していんぐわとれき然あるをのどやむねよてい未ととらずして別ふかた事は座してとと思召ま志くは此ふたいろの因果とやのいんぐわあくらからずとの事なり深く因果と入あらずといふ心にては此話問のまありの生々世々の事をさつねおよせてとれたる所大智なるもあふ大智禪師とかややあり一朝大國にていらく佛道しも行の事れんくふや上まぬらせし又やと人迷ふと死の火をもつて火をけさんと

て土をもつて山をのこんとすかやうおろなる事と人々佛道に心の遠ざる事萬里をへたてし手おえ百八ぼんなるの死づなる珠数をつまぐり二世三世をいの生れう死れうれた、りを見いだし石塔卒都婆にさどくれありとれもひ梓にかけて死人と言葉をのりす事をいひて袖をしぼるもろくの教をろくの道理を失ひ佛がさつよまう語をのり義理をそひきいよくもうもくのとく竹のうらとてり天をのりる物は生々世々うかむとあるべからず西方非西東方非東無地獄無極樂淨土非淨土けんどんをさらすしてしかも又しかも外の大空さんまいにして大蓮花のうちにありたい正直れまひぎやう無さんなり念をさつてしのもさらす是を通力自在のさうとやこから國我朝にいたり上下萬民佛道をねがふ事何宗かしうとて色々たて、とありといへども其源といづれも極樂じやうとにいたい地獄におどすまゑ死との方便之此淨土といふは何國かを我心のうちにあり又地獄といづきをなを大事我心れうちよあり或人達大師おどふ地獄といづれの所ぞやたへていとく汝が心中よんぢんちの三毒これなりとんぢんちとと貪と欲と之方の愛念執着の欲をやなと墮とと腹をたつる念をや痴とはぐちとて何事も心のまよふ死事をなげき歎し我とわが心を憐ます事をやない此三毒かくの如く善惡の報をつくり出し地獄にかつるなまぢぶくとて別よ余の世界はある事にてとあらず又問極樂

どのつれのとあるぞやまたへていとく極樂淨土とて外よあるべからず汝の心中の三毒を拂
 ふ處となち淨土なりと答給ふ佛と衆生とへたて有事なし迷ひれ衆生此とんぞんち我本心よ
 てなき事をしらす一念のいし又にくむによりて地獄にかつなりこの三毒をもととして八萬四
 千のがんぢら發るなりまれば則地獄なり佛といふもさるといふも名とかこれとて同法道之本
 心をささる人をすなち佛と名づくるさうしかれを我心の外に別佛なき事をよく心得て此
 上を常々あるにわけは工夫あらむ道にほあたりいん事うたがひあるべからずは現在の果
 を見て過去未來をしようと経にぞ死おられいよの心と今こゝにて惡心惡逆をよるにわすれ
 ずしてつゝしむ善事心わつて取出し行ふ事之今此生にて其心をわすれずは又今の心を未來
 へ引て人よ生をいたさべきとの事なり佛の方に自在を得たりといへども見わたらざる事あり
 一にて無縁に衆生度をとめたとす二にて衆生かいつくる事あたとす三にはさうおう轉す
 るとめたとす前世れがうめんよよりかんとくしたる善惡のこつとらありかやらの決定の業と
 うを佛がさつれ身よても轉するとかなはず形の善惡福徳の大小壽命の長短衆生の高低の
 事よれら皆前世の業因にたはたる定業あり慈悲しんと福徳の家によられ慳貪は貧苦の身いた
 り柔和みんふくの心ゆあすがたよく生れさては高位高家よりまるとなり殺生したるものと短

命よりまるとかくのとくいづれをみち前世れ惡めんよより惡果を得たる人このよととりをし
 りて今世にて惡行をつくらずを來世とのあらず善果を得べき事唐土わが朝の祖師達をとてめ
 數多き知識のふみふを書殘し給ふ事どもをしめし参らす

明治十九年八月廿八日 齣刻御届
 明治十九年九月十七日 出板御届
 明治十九年十月廿五日 再出板御届
 明治十九年十一月十五日 出板御届



京都府平民

齣刻出版人

上田捨吉

大坂府南區末吉橋通
 三丁目十五番地寄留

大坂心齋橋北詰十五番地

發兌所

駿々堂本店

神戸多門通貳丁目

駿々堂出張店

駿々堂本店發兌書目

- 德川十五代記
- 近世太平記
- 明治太平記
- 養生石後日怪談
- 洋道中膝栗毛
- 一本諸國物語
- 廿二年未來記
- 川世商人氣質
- 川正統記
- (通位)明治起原史
- 給本明治勤功記
- 給本義經勤功記
- 給本操婦女八賢誌
- 給本佐野報義錄
- 給本伊達顯秘錄
- 給本士錫々傳
- 有意世溫泉
- 河後風土記
- 岡名譽政談
- 夷巡島記
- 給本太閤記
- 琴俠客傳
- 給本八相倭文庫
- 前總里見八犬傳
- 刑法刑罰命類一覽表
- 給本平家物語
- 東洋魯敏孫漂流記
- 珍事奇聞
- 歷氣樓
- 廿三年夢幻之鐘
- 源平盛衰記
- 當世娘性質
- 朝櫻日本魂
- 智我物語
- 佐野義勇傳
- 巷說二葉松
- 淀の車
- 雲間月
- 南海奇聞譽音信
- 今淨海六波羅譚
- 夢の手枕
- 馬琴新編水滸傳
- 給本甲越軍記
- 眞田三代記
- 通俗給本三國誌
- 通俗漢楚軍談
- 給本吳越軍談
- 給本西遊記
- 新街夜作樂
- 慶安太平記
- 水戸黃門仁德錄
- 無音傳話術
- 言語對眞法
- 續言語寫眞法
- 懷中日記簿
- 當用日記帳
- 繪本波戰記
- 天一坊實記
- 給本楠公記
- 佐倉義民傳
- 保元平治物語
- 親鸞聖人一代記
- 楓時忠義礎
- 妖怪府
- 給本天滿宮一代記
- 新編昏黃日記
- 明清軍談
- 佳人之奇遇
- 世界進步第二十
- 沙吉比 羅馬盛衰鑑
- 亞戲 羅馬盛衰鑑
- 婦人地球週遊記
- 三十五日間空中旅行
- 交台秘談
- 婚姻條例
- 三國料理獨案內
- 不時珍容即席庖丁
- 六十四品漬物鹽加減
- 世帶實驗錄
- 袖珍浮世床
- 同保元平治物語
- 同平家物語
- 同道中膝栗毛
- 同道道中膝栗毛
- 同續々道中膝栗毛
- 樂歌大全
- 百妖笑々奇如件
- 吉凶禍福獨判斷
- 重修眞書太閤記
- 給本忠義水滸傳
- 禽獸世間狐の裁判
- 禽獸世間談
- 義經再興記
- 鍛鐵の主人
- 近世米國奇談
- 雷名十勇臣傳
- 伊曾保物語

- 近世記聞
- 當世書生氣質
- 椿説弓張月
- 怪談牡丹燈籠
- 給本柳荒美談
- 汗血千里駒
- 平家物語評判秘傳抄
- 日本百將傳
- 加藤清正一代記
- 繪本朝鮮軍記
- 北國奇談櫻の橋
- 天草軍記
- 繪本和田軍記
- 石騷動實記
- 扶桑皇統記
- 三都勇敵傳
- 若見武勇傳
- 歌討名淺廣記
- 名吉原娼妓仇討
- 清水治良傳
- 尼子十勇士傳
- 金紋箱崎文庫
- 花吹胡蝶彩色
- 北條時頼記
- 徳川天下外記
- 吉備大匠入唐記
- 中將姫連豊茶羅

- 釋迦一代記
- 日蓮大士一代記
- 釋迦一代圖繪
- 觀音利生記
- 祐天上人一代記
- 別製紫田舎源氏
- 娘節用合本
- 若緑
- 小説富士の曙
- いろは文庫
- 京わらんべ
- 花の曙
- 善惡卿流行新形
- 糸櫻春鳥奇縁
- 小夜千鳥浪音信
- 梅柳春月曙
- 花鳥風月
- 正札附玉川晒
- 貞操三國鏡艶妓
- 繪本箱裏表紙
- 小女郎蜘蛛怨芋環
- 根岸茶話談
- 大和莊子蝶笄笄
- 春色日本魂
- 夢想兵衛胡蝶物語

- 袖珍夢胡蝶物語
- 想兵衛
- 異國奇談和莊兵衛
- 別製浮世風呂
- 昔語質屋庫
- 七偏人
- 別製道中膝栗毛
- 滑稽地獄電信機
- 滑稽浮世床
- 忠臣蔵偏智氣論
- 當世百不具
- 滑稽四十八癖
- 國法汎論
- 英米憲法比較論
- 國會旅行道案内
- 東洋學術種本
- 諸家小傳近世詩文
- 報國纂錄
- 傍讀四書
- 袖珍春秋左氏傳校本
- 記事論說祝文五百題
- 記事論說祝文五百題
- 記事論說祝文五百題
- 記事論說祝文五百題
- 文字指南
- 改正增補文章大成
- 明治文典大成

- 掌中玉篇大成
- 明治真草字林
- 新撰普通字典大成
- 新撰普通玉篇大成
- のろゝ引大全
- 權利義務獨案内
- 精選民事範要
- 社寺例規類纂
- 大日本法律規則全書
- 傍訓刑法治罪法
- 監獄則
- 通俗訴訟獨案内
- 刑民事控訴法解
- 同指令評刑法
- 内訓法註治罪法
- 刑法治罪法捷解
- 袖珍傍訓刑法治罪法
- 傍訓書式全書
- 現今書式全書
- 現今日用便覽
- 天下一品懷中便利
- 萬民實益活用全書
- 現今活用記
- 一事千金
- 証券印紙心得
- 現今貸金心得

- 小栗外傳
- 豐臣鎖西軍記
- 邯鄲諸國物語
- 播磨院長兵衛
- 袖珍繪本太閤記
- 石川五右衛門實記
- 曉星五郎
- 被切與三郎
- 玩紫講釋
- 將門山瀧夜刃姫
- 石井常右衛門實記
- 才子佳人螢雪美談
- 佐野治郎左衛門傳
- 船越重左衛門傳
- 大丸屋騷動記
- 赤穂精義内侍所
- 袖珍忠臣蔵
- 繪本平泉軍記
- 繪本常夏草紙
- 木曾義仲軍記
- 護國女太平記
- 延命院實記
- 三莊大夫實記
- 國定忠治實傳
- 五十三驛怪猫傳
- 人肉質入裁判
- 高野長英論迷物語

- 雲妙間雨夜月
- 俊寛島物語
- 青砥藤綱
- 千代田城嶺白浪
- 三十三間堂柳の糸
- 櫻田血染雪
- 成田山不動靈驗
- 鈴木主水茶枯録
- 伊賀越前記
- 濱千鳥真砂白浪
- 新田功臣録
- 繪本劔客者列傳
- 佐竹隆動秋田誌
- 忠孝北雪美談
- 馬琴皿血郷談
- 筑波水滸傳
- 日本銀治波語
- 三國一夜物語
- 黄金鬪盃
- 大阪軍記
- 初相撲遺恨大盃
- 水戸祭禮二子仇討
- 小栗實傳
- 安永森鏡
- 生寫朝顔日記
- 箱根權現登仇討
- 巷説兇手柏

- 松前屋五郎兵衛
- 大盤平八郎傳記
- 世路日記
- 自雷也豪傑物語
- 繪本前太平記
- 繪本關ヶ原軍記
- 日本魂
- 勤王餘閑園の常夏
- 道成寺鐘魔記
- 萬國名所圖繪
- 繪本太閤記雜話
- 繪本楠公記雜話
- 繪本忠臣蔵雜話
- 四天王剽盜異録
- 酒井大老實傳
- 日出小僧白浪奇談
- 繪本天満宮實傳記
- 近世英名百首
- 成田山靈驗
- 北雪美談金澤寶記
- 新説黄金花籠
- 名譽長者鑑
- 西洋天一坊
- 西國順禮烈女仇討
- 山石記聞櫻神谷
- 高橋お傳夜刃譚
- 雲切仁左衛門

- 怪談皿屋敷實記
- 村井長庵實記
- 郵便區畫助村便覽
- 日本文は文字新論
- 自由教育論
- 日本開化之性質
- 異國回島奇談
- 宗教競進會
- 和漢手代寶鑑
- 裁縫獨稽古
- 粹の種本
- 軍歌
- のろゝは端歌大全
- 淨るり大和文庫
- 大日本道中記
- 内國旅行必携
- 改正大阪圖
- 十九年三月改正
- 大日本明細全圖
- 十九年五月改正
- 帝國大日本新圖
- 十九年六月改正大形
- 櫻原氏大日本地圖
- 分國詳密万国地圖
- 大久保武藏燈合本
- 繪本松虫塚

- 小三金五郎娘用
- 給本楠公記
- 貞操婦女八賢誌
- 輪廻因果
- 旬傳實々記
- 島田一郎梅雨日記
- 敵討合邦辻
- 敵討天下茶屋
- 赤穂義士銘々傳
- 忠孝美談龜山復讐
- 日本開闢由來記
- 鶴の丸特給鏡臺
- 改正東京新繁昌記
- 繡像奇談
- 娃孃美談泥中蓮
- 任百面相
- 漢士英雄傳
- 白覺珍聞
- 不動智神妙錄
- 地租改正私儀
- 產育造化儀論
- 色事教
- 金儲獨案內
- 日用傳家寶
- 現行會計法規全書
- 西海奇聞霧間雁

- 怪談深閨屏
- 新說小籬の月
- 綴手摺昔木偶
- 美名鳴彌今業平
- 編取黄金の犬
- 眞浪花朝日梯
- 英和筆のこじめ
- 英和自在
- エビシ字様
- 英和五体名頭
- 兒童英學獨案內
- 洋語英和獨案內
- 正則單語獨案內
- 正則會話獨案內
- 正則會話獨案內
- スヘルリン
- ウイルソン
- 第一リーダ
- 第二リーダ
- 第三リーダ
- スヘルリン
- スベルリン
- フライマ
- マス字典英案壹萬便

- 英文單語獨案內
- 第一リーダ獨稽古
- 第二リーダ獨稽古
- サンダ
- 第一リーダ獨稽古
- サンダ
- 第二リーダ獨稽古
- 第一リーダ
- ニューナショナル
- 第一リーダ
- 同獨案內
- ヒチオン文典
- フラオン文典
- プラハツケンボス小文典
- パフレン
- スキント
- 英學五書獨案內
- 英和對譯初學字典
- 英和對譯字典
- 和譯英字林
- 英和對譯新字典
- 英和對譯大字彙

世界第一近世太平記無類特別元價

一大改良豫約出版廣告

森春濤先生序 ● 桂州先生題字 ● 岸田吟香先生題字
 龍齋歌川三郎國松先生密書 ● 諸名家題字

版權免許 繪本近世太平記 全

● 西洋綴給入頗美製
 ● 本全一冊
 ● 紙數七百ペーシ
 ● 定價金五圓

眞正德川十五代記續編 ● 五千部限の豫約實價 ● 並製本四十八錢 ● 上等製本五十五錢 ● 全國通運送料十錢

● 豫約人員申込期限 ● 本書の版權免許他日競賣の患なき心 ● 送本期日 ● 前金と要せざ ● 復す ● 随ひ ● 上續々 ● 加盟申込被下候

る事●諸口軍人吉に迫り瀧川中尉討死の事●山口縣令機ひ臨て攻守の策を運と事●人吉
 落城兵敗走の事●山口縣に賊の張本を討取る事●鹿兒島の軍兵を分て來襲お備る事●人
 豐後路軍屢賊を攻て臼杵佐伯を一掃する事●人吉の軍部署を定め賊日に際參る事●人
 吉士族始末の事●薩摩口官軍進撃附縣官人民を撫育する事●華族伊達宗城四國へ赴く事●附
 官軍進入の事●薩摩口官軍進撃附縣官人民を撫育する事●華族伊達宗城四國へ赴く事●附
 村權令縣會を開く事●川路少將歸京の事●官兵薩摩日向大隅を侵入する事●肥後口の官軍綱の瀨川の
 へ連絡する事●州外の浦に於て難船并豐後肥後口の官兵勇戦の事●肥後口の官軍綱の瀨川の
 事●淺間艦を破る事●大谷大教正大惠を施す事●日向口の官兵頻に賊兵を破る事●官軍進て延岡
 満水を渡り賊陣を破る事●豊後口攻撃并洪水の時官兵術を盡て糧食を飼る事●熊本縣權令
 人民を撫諭し并大谷大教正大惠を施す事●日向口の官兵頻に賊兵を破る事●官軍進て延岡
 を陥す事●賊徒訣別の酒宴を催す事●賊魁西郷官軍を破て可愛嶽の絶頂を奪ふ事●賊徒加治木
 等三田井は出て官軍の糧食を奪ふ事●賊兵大隅れ飯野を経て鹿兒島へ走る事●賊徒加治木
 の圍を切抜夜お乗て鹿兒島縣廳へ薄る事●鹿兒島縣令官物を漁船お移し賊の鏡鋒を避る事●静覺院
 て諸手の官兵と連絡を通ずる事●鹿兒島縣令官物を漁船お移し賊の鏡鋒を避る事●静覺院
 薨去并御葬送の事●振武隊の賊首貴島清討死の事●官兵谷山を鎮靜し并縣廳を加治木お移
 事●官軍圍繞して賊軍を困る事●河村參軍賊の使者よ而會説示の事●西郷隆盛最後決議の
 野田の兩城河村參軍へ情願の事●賊徒平定并首級賞檢の事●大山綱良斬罪の事●諸兵解隊
 事●城山據集の賊悉く滅亡の事●賊徒平定并首級賞檢の事●大山綱良斬罪の事●諸兵解隊
 并山田大山野津三少將凱旋の事●池邊吉十郎石井貞典捕縛并處刑の事●武死人招魂祭の事●凱
 旋式天皇并五箇臺慰問使の事●殘賊處刑の事●軍功賞典并諸賑恤の事

改良豫約出版
 元祖申込本部
 申込取次所

大坂心齋橋北詰
 十五番地
 神戶多門通貳丁目

駿々堂本店
 出張店

有限非賣品特別元價豫約出版廣告

河津祐之君題字 鶯林學人 戲譯
 土居通豫君題字 天香逸史
 草間時福君序

沙吉比 羅馬盛衰鑑

石版密書挿入
 西洋綴頗美製本

●正價壹圓 ●豫約實價 ●五拾錢 ●府外郵送料拾六錢 ●通運遞送料全國平均六錢
 ●豫約人員申込期限 ●本書元價を以て豫約加盟の諸君は願つ ●豫約
 絶てべし豫約申込は ●前金と要せず ●加盟諸君の期限は内郵便 ●送
 本月三十日限です ●製本已に落成に付着金の
 本期日 願序は随ひ遞送すべし

人として沙吉比亞の戯曲を讀むる者未共お文章の妙を論ず可らず人として入器撤該の劇
 を規とざる者未共に沙吉比亞の文を評す可らず英國博士沙美彌成孫と本沙氏と同節の

人に非ず然も猶其同氏を評する噴々として口を極めたり日ふ氏の文章の大且盛あると只其文字の精妙のみならず巧み人性の蕙粹を啓き又能く造化の秘奥を發す千古お通じ百世に超へ不磨獨行の文章と謂べしと戎孫氏尙且然り況や其他をや此戯曲と羅馬史共和世記の未棄彼該撒非望の企のまどより八志士義舉殉難のこゝろ至迄精確の事跡を細寫せしものにて則所謂該撒の劇あり世に戯曲の譯本少し苟も文字お志ある者と座右必具の珍書なること一讀以て其欺りざるを知り玉へ

- 目録 ●第一回羅馬府街道の段 ●第二回羅馬府公園の段 ●第三回羅馬府城外密議の段 ●第四回ブルタスの館庭園の段 ●第五回シザルの館正寝の段 ●第六回政事廳近傍街道の段 ●第七回ブルタスの第衛門外の段 ●第八回政事廳事變の段 ●第九回羅馬府公會場演説の段 ●第十回羅馬街道の段 ●第十一回アントニーの館の段 ●第十二回サーヂスの陣營外の段 ●第十三回ブルタスの陣屋の段 ●第十四回ヒリビ野對陣の段 ●第十五回ヒリビ野戰場の段 ●第十六回同カシゴスの自殺 ●第十七回同 ●第十八回同ブルタスの自殺 ●以下略と

製本落成三千部限特別元價發賣廣告

式亭半馬戲述 宇田川半痴先生校閱

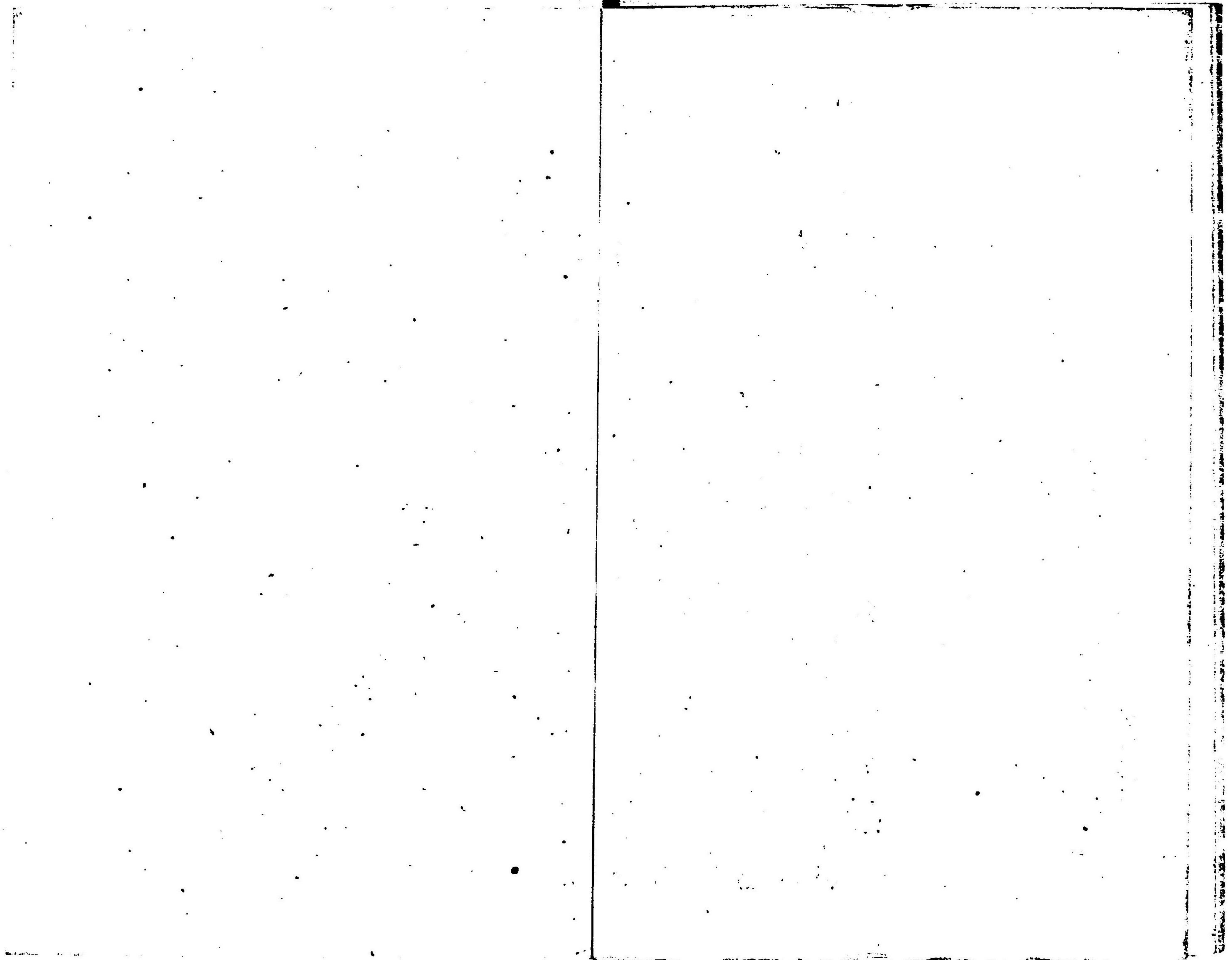
有喜世溫泉全

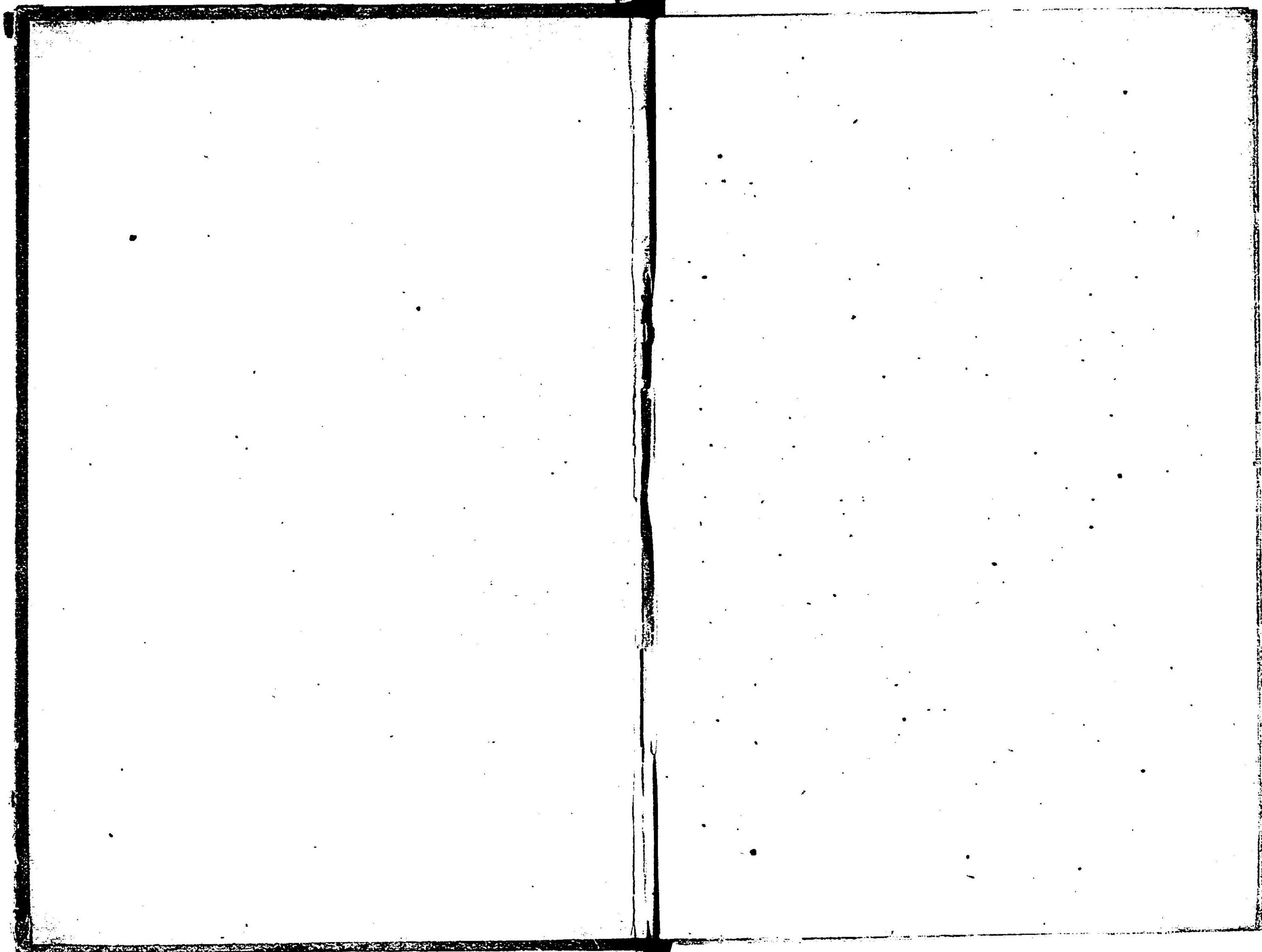
- 密書挿入
- 西洋綴全壹冊
- 本日出版
- 頗美本三千部限特別
- 元價三十錢
- 府外郵送料廿錢

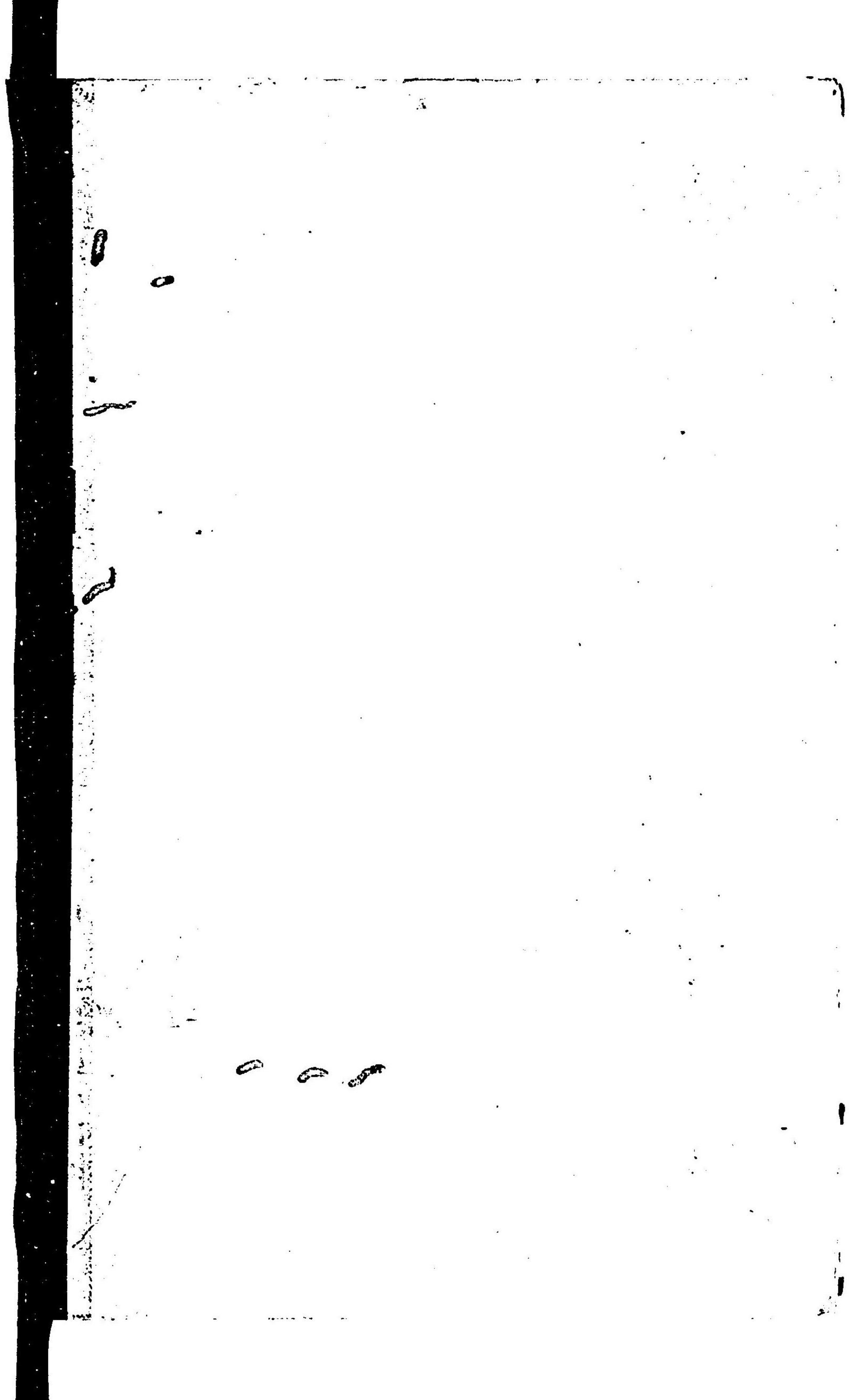
駸々堂本店

一回一九の膝栗毛出てより類似の駿馬世も現れ既西洋迄も駢出すに至れり鯉丈の八笑人有て七變人繼ぎ三馬の浮世床を近來西洋床と擬たり然るに獨浮世風呂も限りて後釜無きと何ぞや他無し滑稽の至と盡せるが故なり今般出版する所の有喜世溫泉と本即庵の靈魂飯よ此世お姿を現としヒウドロくとも何と云とす半馬先生が机邊よ立ち全氏に口授せらしを障子越し大東樓忠樂人子の速記法を以て直寫せし目下の人情を穿ちたる滑稽解題代奇書おして代言人新聞社員投機商幫間藝妓權妻等の人物の溫泉裡に在つて意中を吐露する内幕話奇々怪々妙稀手烈あるを看て故人三馬先生が没後の門人半馬子も授與せられたりと版元の云へる言葉の虚ならざるを一目瞭然お判定とべしでげすのら購求て御覽々々大安賣本家本元 大坂心齋橋北詰 十五番地 駸々堂本店 相庭崩し書林元祖

駸々堂本店









089868-000-4

特12-530

一休諸国物語図絵

平田 止水/編

M19

DBN-0143

